

2010
October

10月

高校版
Volume

4

2 私を育てたあの時代、あの出会い

挫折した私を変わず褒め続け、「教師」にしてくれた
宮崎県立延岡星雲高校◎柳井健二

4 特集

くり返し「考えさせる」
進路指導6 座談会 生徒が「気付き」を得るために内面を深める過程をくり返す
栃木県・私立文星芸術大学附属高校進学統括部長◎牧島勝利
三重県立神戸高校教頭◎鈴木達哉
鹿児島県立川内高校教頭◎藤崎恭一10 学校事例① 秋田県立能代高校
「書くこと」と「対話」で将来を何度も考えさせ目的意識を持たせる13 学校事例② 埼玉県立不動岡高校
「知の総合化」を目指し考えさせる進路指導で知識のすそ野を広げる

16 指導変革の軌跡

16 宮城県仙台南向山高校
進路学習の再構築◎2年生での「志望理由書」作成を軸に生徒に徹底的に考えさせる20 和歌山県・私立和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校
SIの再定義◎学校のアイデンティティー確立と手を掛ける指導で進学校へと脱皮24 群馬県立前橋東高校
進学実績の向上◎生徒の進路意識の涵養と教師の指導力向上で「進学型総合学科」を実現

28 生きたデータの徹底活用

生徒と教師の助走期間としての3年生0学期の意識付け

32 未来をつくる大学の研究室

風に強い建築物を造り
安全・快適な住環境の創造を目指す
東京工芸大大学院 工学研究科 田村幸雄研究室

36 30代教師の「転んでも起きる!」

「先生の授業はハズレ」と評価され、思考力と得点力が結び付く授業を模索
鹿児島県立鹿屋高校◎立神倫史

38 新課程への助走

教科の中での言語活動で、考える力と表現力を養う — 広島県立忠海高校の実践から —

42 大学選択 新たな視点

学びと社会との接点を意識させ学習意欲を高める大学・学部

50 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。



県内屈指の
進学校である
宮崎県立宮崎
大宮高校へ新

卒での赴任が決まったときは、不安よりも自信の方が大きかったです。オーラル指導を重視する同校なら留学経験が生かせるし、生徒も若い自分を好意的に迎えてくれるはず。だから着任直後、同じ英語科の谷山達博先生が私を食事に誘い、「宮崎大宮ならではの指導を理解すること。ただし指導では3割は自分の色を出さない」と話してくれたときも、それがどういふことなのか、本質的なことは分かりませんでした。「柳井さんが教えるクラスとは、定期考査の平均点で10点差をつけるから覚悟しなさい」と言われたときも、「そんなに差がつくわけがない」と高を括っていました。

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

挫折した私を 変わらざる褒め続け、 「教師」にしてくれた

宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二 YANAI KENJI

生徒がそうであるように、教師も失敗からこそ多くを学ぶ。

だが、失敗経験は、誰にとっても苦く、悲しく、厳しい。心温かな先達の存在があつてこそ、失敗を成長の糧に出来るのだ。

宮崎県立延岡星雲高校の柳井健二先生が苦渋の中での恩師との出会いと、大きな成長を振り返る。



「これではダメだ」と思いながら、私はほかの先生に相談することが出来ませんでした。プライドが邪魔をしていたのです。4月末、教育委員会への報告書に指導教員から「未だ学生気分」と書かれる始末。さらに、教育実習生が最後の実習を終えた日、ある生徒から「柳井先生はいつ大学に戻るの?」と嫌み

を言われました。生徒との関係づくりもうまくいかず、教師を辞めるしかないのかも、と思いました。5月のPTA総会とき、保護者に初めてベテランの先生の授業を見に行きました。授業のリズム、発問の仕方など、

すべてが違いました。すぐに自分でも真似をしてみました。が、やはりうまくいきません。そこで、授業が始まってからもずっと「調子はどうか?」と親しく声を掛けてくれていた谷山先生に、私は意を決して授業に関する疑問をぶつけたのです。谷山先生は私の問いに一つ一つ明快に答えてくれました。

先輩教師の言葉

次代を担う人が育っていく場をつくりたかった

宮崎県立都城商業高校校長 TANIYAMA TATSUHIRO 谷山達博



柳井先生の第一印象は「生意気」。留学経験があり、体はでかいし、おまけにイケメン。気に入らないですよ。でも彼らに頑張ってもらわないと、宮崎県の英語教育の未来がない。そう思っていました。

宮崎大宮高校のような進学校に赴任すれば、誰だってビビるものです。私も初めて進学校に赴任したときはそうでした。新任であればなおさらです。だから、柳井先生が着任したときも、食事に連れ出して、話をしたのです。かつての自分と同じような思いをしないで済むよう、不安を取り除いてあげたかったです。分からないことがあったら何でも気軽に聞いてもらえるような関係を、若い人との間に築こうと思っていました。



谷山先生に膝詰めで教わる日々が始まりました。先生の授業を何度も見学し、プリントを配るタイミングにも意味があることを知りました。雑談を織り交ぜながら、生徒の集中力を高めるその授業は、「生徒は勉強しなさいと言われればするもの」と思っていた私のそれとは全く別物でした。谷山先生の授業で気付いたこと、ほかの先生はつきり言って、当時の私は

同僚の教師からも生徒からも、「ダメ教師」のらく印を押されていました。それなのに谷山先生は、英語科共通で使用するプリントや校内テストの問題を「あんたがやってみなさい」と私に作らせてくれました。プリントの出来が悪く、迷惑をかけるときもありましたが、それでも先生は「よくやった」と褒めてくれました。そしてそれが終わるとまた「柳井さんや



らせてみようや」と私にチャンスを与えてくれるのです。赴任3年目、希望していた3学年への持ち上がりが出来なかったとき、3年間の指導の流れが分かるようにと、谷山先生が「2単位だけでも、柳井さんに持たせてみよう」とほかの先生に働きかけてくれたこともあります。だから4年目、やっと1年担任を任せられ、先生と同じ学年団になれたときは、谷山クラスに勝つことでこれまでの恩を返そうと心に誓いました。定期考

査の平均点もやっと同じくらい取れるようになっていたはず。教師生活のスタートは、挫折と模索の連続でした。谷山先生と出会えたからです。今、私が教師でいられるのは、谷山先生と出会えたからです。

右 たにやま・たつひろ 英語科。宮崎南高校、高千穂高校を経て、宮崎大宮高校に。同校の教壇で10年間指導する。その後、延岡西高校教頭などを経て、現在、都城商業高校校長を務める。
左 やない・けんじ 英語科。初任の宮崎大宮高校に7年間勤務。その後、延岡高校に9年間務め、現在、延岡星雲高校で2年目を迎える。

たのも事実です。ベテラン教師の授業を真似してなかなかうまくいかない彼に、「全部真似してもダメだよ。3割は自分の色を出して仕上げていかないと」と何度も説明しました。プリントや作問を任せただけは、それで柳井先生が伸びるからです。宮崎大宮高校が県内で初めて65分授業を採用したときも、私は研究授業を柳井先生にやってもらおうと英語科で提案しました。授業をたくさん先生の現場に見てもらい、アドバイスを受けられることで更に大きく伸びてほしかったのです。だから、色々な場を柳井先生に提供してきたつもりです。



柳井先生は最初の数年間はとて苦しいんだようすが、それでも1年ごとにすぐ成長していきました。悩んだ分だけ確実に育っていたんです。だから私は「よくやった」と柳井先生を褒めたのです。今では宮崎県の次代の教育を担う教師の一人になりました。

今の若い世代の先生方には、若さと自分らしさをもっとむき出しにしてもらいたいですね。そして、パソコンを閉じて、その分ほかの先生と語り合ってほしい。多くの悩みや疑問は、教師同士の対話の中で解決するべきものなのですから。

くり返し 考えさせる 進路指導

生徒が高い志と目的意識を持って人生を歩んでいくために進路指導ですべきことは何か。
長年進路指導に携わってきた教師による座談会と学校事例を基に考える。

高校で
進路学習を
経験した
卒業生の声

進路指導から得たものは、「進路の方向性」でもなければ「特定の学問への興味関心」でもない。進路を考える、いわば「癖」だ。誰もが共有するゴールがない中で、自分の「ゴール」を必死になって探そうとする態度である。高校時代に自分の進路を真剣に考えた人であれば、自分がどう生きるべきなのか、自分が何に適性があるのか、常に考えながら生きていくことが出来るだろう。

栃木県私立A高校の
進路学習の感想文より（抜粋）

1 「進学指導」から「進路指導」へ

【VIEW21】2006年10月号特集】

1970年代から80年代前半

共通一次試験の導入

学習指導要領に沿って到達度を測る共通一次試験の導入により「一斉指導」が可能となる。
一方で、大学の序列化・入試の輪切りが起り始める

1980年代半ばから90年代前半

大学入試センター試験の導入

私立大のセンター試験利用、教科・科目の「アラカルト方式」が採用される。入試に関係ない教科・科目を勉強しない生徒が増加。志願倍率が上がり、偏差値を軸にした指導が行われる

1990年代後半から現在

大学全入時代の到来

大学入試だけでは学習の動機付けとして機能しにくくなる。2003年度導入の「総合的な学習の時間」などにより大学進学後も視野に入れ、自分自身の生き方を考えさせる指導が行われ始める

2 進路指導でくり返し「考えさせる」意義

【座談会 P.6】

自分の可能性を広げるために
勉強が必要だと気付かせること

栃木県・私立文星芸術大学附属高校 **牧島勝利**先生



結論が出なくても、悩んで考え抜く経験を
することで自立につなげること

三重県立神戸高校 **鈴木達哉**先生



「志」のために「無理」ができ、
社会で生き抜いていく力を育てること

鹿児島県立川内高校 **藤崎恭一**先生



3 生徒にくり返し「考えさせる」ための工夫

秋田県立能代高校

【P.10】

- ◎「ライフプラン」と「志望理由書」で「志」を高く持たせる
- ◎書くことと対話を繰り返し、自分と向き合わせる

埼玉県立不動岡高校

【P.13】

- ◎ディベートを通じて、「知識のすそ野」を広げる
- ◎集大成として行う個人研究で「知の総合化」を目指す

生徒が「気付き」を得るために 内面を深める過程をくり返す

進路指導で生徒にとことん「考えさせる」ことには、どのような意味があるのか。生徒が考えるために、教師はどのような支援が出来るのか。長年、進路指導に携わってきた3人の先生方に聞いた。

「社会で生き抜いていく力が求められている」

編集部

社会環境が大きく変化する中で、以前と比べて生徒に変化を感じる部分がありますか。

鈴木 最近の生徒は全般的に幼く、受け身になっていっているように感じます。しかし、子どもの能力が落ちているとか、意識が下がっているという事ではなく、成長のスピードが少し遅くなっているだけだと思うのです。子どもの本質は何も変わっていません。子どもが潜在的に持つ力を引き出すために、我々教師が以前よりもっと深くかわることが必要ではないでしょうか。

牧島

私もそう思います。むしろ、教師が表面的なところで生徒を見て、「今の生徒は考える力がない」と枠にはめていっているのではないのでしょうか。私は、県を代表する進学校にも、学力的に厳しい学校にも勤めてきました。その経験からいえば、どの学校でも生徒の本質に違いはありません。生徒は皆、考える力、学ぶに向かう姿勢、そして「より良く生きたい」という思いを潜在的に持っています。大切なのは、我々教師が生徒の可能性を信じ、生徒が持っている力をいかに引き出すかということだと思います。

藤崎

今の生徒は、努力した分だけ未来は良くなるという、我々が高度

成長時代に抱いたような希望を持ちにくい時代に身を置いています。「努力⇨幸福」ではなく、「相関がある」程度の認識かもしれません。しかも大学全入時代となり、頑張らなくても大学に入れます。そのため、「自分の志」のために無理をする心境になりにくいのだと感じます。

一方で、企業が新卒者を見る目は年々厳しくなっています。就職しても、会社がその先どうなるかは分かりません。ですから、「より良く生きたい」という気持ちを持ち、将来を考えて行動し続ける、いわば社会で生き抜いていく力を付けることが大切だと思います。我々は、そうした生きる姿勢や力を付けるための一



栃木県・私立文星芸術大学附属高校進学統括部長
牧島勝利 Makishima Katsutoshi
教職歴48年。同校に赴任して10年目。担当教科は生物。県立高校の教師を38年間勤め、定年後、同校に赴任。英進科長として、学習指導・進路指導の両面から進学実績の向上に努める。県立高校時代は、栃木県立宇都宮高校教頭、栃木県立黒磯高校校長などを歴任。

つの場である進路学習の重要性をもっと認識すべきかもしれません。

自分の可能性を広げるために 何が必要か気付かせる

編集部 先生方は進路学習の意義は

どこにあるとお考えでしょうか。

鈴木 私は三重県立川越高校で「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」の導入に携わった時から、生徒の志を育て「世のため、人のため」になれる人材を育てることを目標に据えてきました。社会とのかかわりの中で自分の生き方を考えさせるこ

三重県立神戸高校教頭

鈴木達哉

Suzuki Tatsuya

教職歴29年。同校に赴任して1年目。担当教科は国語。三重県立川越高校で学校改革に携わり、進路指導主事として、進学実績向上を牽引する。その後、三重県立津高校進路指導主事を経て現職。



とで生徒の自立を促し、学びへのモチベーションを高められるのではないかと考えたからです。

進路学習の一番の目的は、生徒に社会で生きていく力を獲得させること、つまり「自立させること」だと考えています。そのために必要なのは、生徒自身が自分の進路についてとことん考える経験ではないでしょうか。節目となる進路選択の時に、たとえ結論が出なくても、悩んで考え抜いた経験が、生徒を大きく成長させるのだと思います。

藤崎 私も進路学習を通じて生徒が自分の頭で考えることは、非常に大切だと思います。生徒にとことん考え抜かせた上で、教師は辛抱強く待つ。進路学習は生徒が独り立ちするための「期」を「待」つ教育、すなわち「期待」の教育だといえます。生徒が考えることで、教師の指導が浸透しやすくなる側面もあります。生徒一人ひとりの個性や能力、進路は違いますが、我々は皆にとつて大切だと思うことを生徒全体に向けて話します。我々が投げかける言

鹿児島県立川内高校教頭

藤崎恭一

Fujisaki Kyoichi

教職歴27年。同校に赴任して2年目。担当教科は数学。鹿児島県立甲南高校では、進路指導主任として「K-IPプロジェクト」（総合的な学習の時間の確立、進路学習の推進などを通して、進学実績の向上に努める）



葉や指導を自分のものにしていくには、生徒それぞれが自分の立場に当てはめて考えなければなりません。生徒に考えさせる習慣を付けることで、我々の発信の受け止められ方も変わってくるのではないかと思います。

牧島 教師や生徒の中には、進路学習の目的は「将来の目標を見つけること」だと考えている人がいます。もちろんそれは大切ですが、目標探しばかりを強調すると、「自分はない職業がない」ということを勉強しない理由にする生徒が出てきます。しかし、自分の適性なんてそう簡単には見つかりません。見つからないのなら、なおさらどのような進路にも対応できるよう、どの教科もまんべんなく勉強することで自分の可能性を広げなくてはならない。そこに気付かせるのも進路学習の役割だと思っています。

進路学習で大切なのは、活動を通して、生徒に幅広い選択肢を示すこととあり、自分の可能性に気付かせている生徒は、その実現のために今勉強しなければならぬことに気付くでしょう。具体的な夢を描けない生徒も、勉強することが将来の可能性を広げるということに気付くかも知れません。進路指導はまさに「気付き」の教育だと思います。

書くことが自分を見つめ 進路を考えることにつながる

編集部 進路学習では生徒に「考えさせる」ことが重要というお話でし

「書くこと」は、自分自身と向き合うこと

・牧島勝利先生

だが、それにはどのような方法が考えられますか。

鈴木 生徒が自分で「考える」ためには、書いたり話したりする機会を出来るだけ多く設ければ良いと思います。人間は言葉を通じてしか考えることは出来ません。考える力を高めるには、自分の考えを言葉にすることが大切なことです。

「読み書きにはセンスが必要だ」という人がよくいますが、国語教師の立場から言うと、読み書きは訓練次第で伸ばすことが出来るスキルです。書き方を身に付けられれば、書くことが楽になり、考えることも楽になります。そのスキルを身に付け、更に読む・聞くという受信する力を高めることで、考えを膨らませられると思います。

牧島 私も「書くこと」を進路指導の最重要課題として位置付けています。「自分はどのような人間なのか」「これからどのように生きていきたいのか」。書くことを通じて自分と向

き合ううちに、真剣に自分の将来について考えるようになるのです。なぜ勉強しなければならないのか悩んでいた生徒も、自分の可能性を広げるために必要なのだということに気がきます。書くことは「考えること」そのものだと言えるでしょう。

「生徒の書いたものには手を入れないといけない」とか、「いい加減に書いたものであれば、そのままにはしておけない」という意識から、書かせる指導に負担を感じる先生もいるかもしれません。

私の指導では毎回のように400字のレポートを書かせます。字が少しくらい汚くても、多少誤字があっても構いません。とにかく規定の分量を書かせます。添削はしません。書き方の訓練ではなく、あくまで自分と向き合い、自分をさらけ出すことが狙いだからです。生徒には「書けないのは、考えていないからだ」と伝えます。逆に、書けば自分を見つめられるようになることも伝え

ます。自分が成長しているという実感さえあれば、生徒は自ずと書くようになり、進路についても深く考えるようになります。

鈴木 教師がテーマを示し、原稿用紙を渡すだけでは、書けない生徒も大勢います。書かせる指導では、生徒が自分で考えられるように導いていく教師のコーチングスキルが非常に重要です。

例えば、「勉強にやる気が出ない」と書いた生徒に対して、「どうしてやる気が出ないの」「好きなことには興味を持てるよね」など、生徒が自分で考えられるように教師がさりげなく誘導していきます。この時のポイントは、教師が話すのではなく、生徒自身に語らせるということです。教師の「問い掛け、引き出す力」と言い換えても良いかもしれません。生徒の可能性は無限にあるということを前提に、生徒に考えさせるコーチングのスキルを教師が身に付けることも、進路学習の成否を左右する鍵になると思います。

教師は生徒を見守り 機を逃さずに評価する

編集部 進路学習を進める上で、教師のかかわり方についてお聞かせください。

藤崎 教師が一方的に教え込むスタイルだけでは、必ずしも生徒の意欲を育てることはなりません。学校が進路学習のプログラムをしっかり組み、全体をコントロールする一方、肝心な場面では生徒自身の主体性や判断に委ねる場面をつくる。少々不安でも、教師がぐっとこらえて見守ることで、生徒に自分で考えようとする姿勢が身に付くようになると考えています。

鈴木 面談でも、多くの場合、教師のティーチングになりがちだと思います。「このレベルの生徒にはこのくらいの大学だろう」という思い込みが先行し、つい押しつけがましい指導になることがあります。教師が

「志」のために「無理」が出来る生徒を育てたい

・藤崎恭一先生

一方的に話すのではなく、生徒が話すように仕向け、話してきたら「なぜそう思うの」と粘り強く問い掛けながら、生徒から言葉を引き出すことが、生徒が自分で考え、内面を深めることにつながるのです。

藤崎 進路学習では、生徒に自分の成長を実感させることも大切です。教科学習と違い、出来たものが不完全であっても、努力に対して生徒を評価できるのが進路指導の良さです。取り組みを通して、生徒に何らかの学びがあれば、大変意義深いものになります。進路学習のメリットを生かして、生徒を前向きな気持ちにさせる工夫が必要です。

進路学習の意義を熱く語れる教師はいるか

編集部 お話しいただいたような指導を行うために、学校組織には何

求められているのでしょうか。

鈴木 勤務校のある三重県の場合、先進校の進路学習のノウハウが他校にも共有されていて、多くの学校でカリキュラムに組み込まれています。しかし、取り組みの形は整っていないものの、理念や目的を校内でしっかり共有できていない場合もあるようです。「魂」がないまま形だけの取り組みとなると、前年度の内容の踏襲となりがちです。そのため、活動の中心を担っていた教師や情熱を持った教師が異動してしまった途端に、期待していた効果が得られなくなることが起こっているようです。

牧島 確かに、取り組みを始めてから年月が経つと、前年度の踏襲になりがちです。私は、進路学習を効果的なものにするには、二つの条件が必要だと思っています。一つは、進路学

生徒自らに語らせることで「考え」を深める

鈴木達哉先生

習を行うための総合学習やLHRが、不定期で一時的な取り組みではなく、カリキュラムに組み込まれていること。もう一つは、教師が進路学習の意義を明確に理解することです。進路学習は「生き方」を考える学習です。つまり、教師の人生観も大きくかわります。いろいろな価値観がある中で、これを進めていく



には、生徒にその意義を熱く語れる教師が絶対に必要なと思います。

藤崎 進路学習を維持・発展させる苦労は確かにあります。学校の実態を熟知した教師集団がつくり上げたプログラムを、異動してきたばかりの教師が同じように行うのは大変です。時間の経過と共に、制度疲労が起ることもあります。取り組みを効果があるように継続するポイントは、自分たちが実施して感じた「違和感」を2、3年のスパンで話し合い、今、目の前の生徒に合った形に修正することです。こうすることで、「意義を語れる」先生が後に続いていくのではないかと思います。その際、生徒から見ても魅力的なプログラムであることも重要です。生徒から「調べよう」「深めよう」という意欲を引き出し、自ら学ぶことの楽しさを味わわせる。ただし、我々教師が出来るのはそこまでです。高校の進路学習では、社会に出た時に自ら学び、工夫して生き抜いていこうとする姿勢の土台をつくることに力を注ぐべきだと思います。

「書くこと」と「対話」で 将来を何度も考えさせ 目的意識を持たせる

秋田県立能代高校は、2007年度から「Will Project」を展開している。書く指導と教師との対話を通じ、生徒に自身の将来を徹底的に考えさせ、大学卒業後を見据えた進路意識を育み、学びへの意欲を高めようとしている。

第1志望へのこだわりが薄い 生徒の意識を変えたい

秋田県北部を代表する進学校である能代高校が夢と志の育成を進路指導の柱に据えたのは、「与える一方の受験指導」に限界を感じたからだ。同校では学力別の特別補習や難関大対策などの手厚い指導により、例年120人前後が国公立大に合格している。一方で、多くの教師が生徒の志の希薄さを感じていた。生徒はまじめに勉強するものの、受験が迫る時期に模試の成績が少しでも下が

ると、その学力で入れる大学に志望も下げてしまうという具合だった。進路指導主事の石井勇悦先生は当時の生徒の意識を次のように話す。「大学進学を希望していても、目的意識が希薄で、第一志望へのこだわりが薄く、踏ん張りが利かないのです。目先の受験指導ではなく、将来を真剣に考えさせ、夢、特に志を育てることが重要だと感じました」この課題解決に向け、2007年度に着手したのが「Will Project」だ。「大きな夢と高い志を持ち、自己の可能性に挑戦する気概を持った生徒

の育成」を目指し、構想したプロジェクトである。

核は「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中心に行う「考えさせる」進路学習だ。1年生は職業研究や社会人講話を通して「社会を知り、夢を育む」、2年生は踏み込んだ進路学習で「自分を知り、志を確かなものにする」、3年生は進路別の探究活動を行い「挑戦する気概を育てる」という目標を基に進路学習を計画した。将来をしっかりと考える、目的意識を持てるような指導としたのだ。

「ライフプラン」を作成し 自分自身の一生を考える

同校の進路学習の特徴の一つは、大学だけでなく、将来の職業や家庭も考えさせ、大学進学に対する目的意識を持たせていく点だ。1年生の末に行う「ライフプラン」(図)では、現在から死ぬまでの自分の一生を表にまとめ、夢を実現するための将来構想を書く。山本達行校長はその意義を次のように語る。「高校生は、『人生はいつまでも続くもの』と思いがちです。しかし、

秋田県立能代高校

◎1924年に県立能代中学校として開校。2007年度に文部科学省「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」の指定を受け、夢と志を育む「Will Project」を展開。部活動では、10年に軟式野球部が全国制覇を果たした。

設立 1924(大正13)年

形態 全日制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約235人

10年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、秋田大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、国際教養大などに114人が合格。私立大は、上智大、中央大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ212人が合格。

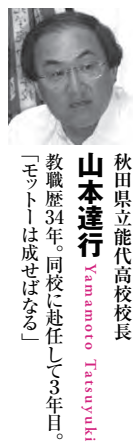
住所 〒016-0184 秋田県能代市字高塚 2-1

電話 0185-54-2230

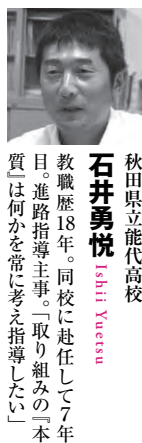
Web Site <http://www.noshiro-h.akita-pref.ed.jp/>

社会で活躍できる期間はせいぜい四、五十年です。限られた人生の中で何が出来るのかを考えさせることは、高校生にとって非常に意味のある経験だと思います」

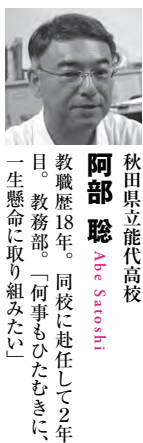
「ライフプラン」には、節目とな



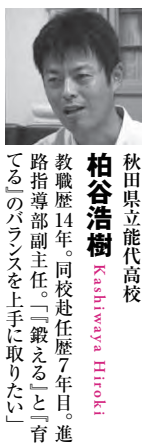
秋田県立能代高校校長
山本達行 Yamamoto Tatsuyuki
教職歴34年。同校に赴任して3年目。「モットーは成せばなる」



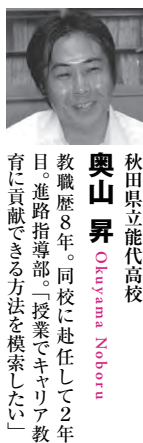
秋田県立能代高校
石井勇悦 Ishii Yuetsu
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「取り組みの本質」は何かを常に考え指導したい」



秋田県立能代高校
阿部聡 Abe Satoshi
教職歴18年。同校に赴任して2年目。教務部。「何事もひたむきに一生懸命に取り組みたい」



秋田県立能代高校
柏谷浩樹 Kashiyama Hiroki
教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導部副主任。「鍛える」と「育てる」のバランスを上手に取りたい」



秋田県立能代高校
奥山昇 Okuyama Noboru
教職歴8年。同校に赴任して2年目。進路指導部。「授業でキャリア教育に貢献できる方法を模索したい」

る年齢とその時々々の「学校・職業・夢」「家庭」の状況、「志や思い」を書く。ロボット研究、管理栄養士、高校教師など、思い描く未来像はさまざまだが、「夢に向かって近づいていく」「社会に貢献できる会社就職したい」などのコメントから、自分の将来を前向きに考えようとする思いが伝わってくる。

ただ、10代半ばの生徒に自身の一生涯を思い描かせることは簡単ではなく、「就職」「結婚」「老後」の3

図 「ライフプラン」の生徒の書き込み例

My Life Plan		夢と志	家族の思い
高度な技術 豊かな態度力を持ち、人々の暮らしがより良いものとなるための工学研究を行う。		絶対入学し夢をかなえたい。enjoyします。	
16	18	22	26
30	31	33	36
46	50	53	64
66	70	78	85
こんな人生にしたい	やりたいと思、たことはやる！ やりきる!! そして楽しむ		

生徒は大学進学、就職、結婚、仕事などを思い浮かべながら、どのような人生を送りたいのかを考える *学校資料を基に掲載

特集 くり返し「考えさせる」進路指導

とこそが重要なのです」

社会と自分とのギャップを体験させ、考えさせる

夢と現実とのギャップに気付かせることも、進路を考えさせる上で欠かせない。同校では、夏休みに2年生全員がインターンシップを行う。就きたい職業への理解を深め、実現に向けて、自分が今何をすべきかを考えさせることが目的だ。例えば、ある医師志望の生徒は医療現場での実習を通じて、「医師がこれほど厳しく、コミュニケーション能力が必要な仕事だとは思わなかった。自分が努力すべきことが明確になった」と感想を述べた。

「職業人として責任を果たしていくために、学力や技術以外にも必要となる能力は多くあります。インターンシップでそれらを体感し、自己のポテンシャルを高めるべく、その後の高校生活を充実させることが真の狙いです」(石井先生)

そうした気付きを得るには、生徒自身が高い意識を持ってインターン

シップに臨む必要がある。派遣先を決める際には、「なぜその職業なのか」「その職業を通してどのような社会貢献をしたのか」などを100字程度で書かせる。それを基に担任と副担任が面談を何度も行い、「ここはもっと具体的に」などアドバイスをしながら書き直しをさせて、生徒の考えを深めていく。

「一度の提出でOKとなる生徒はほとんどいません。とことん考え抜いて決めた派遣先だからこそ、目的意識を持ってインターンシップに臨めますし、実際の体験から得るものも大きいのです」(阿部先生)

担任の負担が大きいようにも見え、直すべき箇所は赤線を入れたり○で囲んでおいたりして、直接、面談で伝える。進路指導部の奥山昇先生は「生徒と対話を繰り返すうちに、通常の面談では見えない側面を知る機会にもなります。物理的には大変ですが、生徒把握の機会と捉えれば負担感はありません」という。

「志望理由書」の作成を通して考えを深める

3年間の進路学習の中で、最も

重要な課題は2年生の最後に書く「W3プラン」(志望理由書)だ。これは、2年間の進路学習を通して培った夢や志を実現するための大学・学部を選び、志望理由を約2000字にまとめるというもの。

執筆に際しては、盛り込むべき観点(これまでの活動から得た価値観や課題、その大学でなければならぬ理由、卒業後の社会貢献など)を示したワークシートにまず取り組み、それを基に文章を構成する。ここでも鍵となるのは、生徒と教師との対話だ。ワークシートに沿って書けばよいとはいえないものの、第一稿の大半は薄い内容で、脈絡もない。担任・副担任と何度もやり取りをする中で、生徒は自分と向き合い、悩みながら考えを深めて、志望理由を書き上げる。

「W3プラン」での志望校は、あくまで自分の夢や志を実現するのにふさわしいかどうかという観点で選ぶ。難易度などの合格可能性までは考慮しない。夢の実現に向けた「宣言」のようなものだ。

それまでの進路学習で必要な自己分析や学部・学科調べなどはほとんど

ど終わっているため、志望理由書を書く頃には、多くの生徒が志望校を絞り込んでいる。進路指導部副主任の柏谷浩樹先生も「志望校決定が早くなった」と指摘する。

「以前は、3年生の夏になっても志望が未定という生徒が少なくありませんでしたが、今では多くの生徒が2年生の秋までに志望を決めるため、目標に向かって早く動き出せるようになりました。また、『志望理由書』で掲げた目標が高ければ高いほど、3年生での学力の伸びが大きいと感じます。偏差値で選ぶのではなく、しっかり考えた末での志望なので、実現に向けて前向きに取り組めるからではないでしょうか」

高い志を持つことが生徒を学びに向かわせるようだ。

「考えさせる」大切さを教師自身が実感

推薦・AO入試による合格者が増えたこともプロジェクトの成果の一つだ。以前は合格者が1桁だったが、07年度以降は毎年20〜40人が合格するようになった。さまざまな取り組みの中で考えを深める活動を積

み重ねた結果、目的意識が明確になり、自分自身の言葉で志を語れるようになったことが、効果的なアピール材料になっているようだ。

進路学習に対する教師の意識も大きく変わった。石井先生は「進路選択ありきではなく、まずは教師が生徒に考えさせることで、志を育む指導が不可欠だと実感しました」と述べる。授業中、教科内容に関連させながら社会貢献や志の大切さについて話す教師が増えているのも、意識の変化を示している。

課題は取り組みの継続だ。柏谷先生は、「変えるものと変えないもの見極めが重要」と指摘する。

「取り組みをがらりと変えてしまうと、当初の思いは継承されませんが、しかし、何も変わらなければ形骸化する恐れがあります。生徒に考えさせながら志を育むという根本は変えずに、目の前にいる生徒の変化に応じて、不断に取り組みを見直すことが大切だと感じています」

10年3月にプロジェクト1期生が卒業した。成果と課題をまとめ、次に継承していくこと。プロジェクトの真価が問われるのはこれからだ。

埼玉県立不動岡高校

「知の総合化」を目指し 考えさせる進路指導で 知識のすそ野を広げる

埼玉県立不動岡高校は、「Fプラン」により自ら考え行動できる生徒の育成を目指す。系統的な進路学習により知識のすそ野を広げ、知識を結び付ける経験をさせることで、社会に出た後も伸び続ける力を育んでいる。

自分自身と向き合い 葛藤する経験が重要

不動岡高校が「総合的な学習の時間」で行う「Fプラン」は、自分の将来を見据えて自ら学び、考え、行動できる生徒を育成するための進路学習だ。1999年度から3年かけて目標や内容などを整備し、02年度の1年生から本格的に導入した。当時、課題となっていたのは、勉強はするものの自分に自信が持て

ず、目的意識もなく漫然と進路を考えさせる生徒の姿であった。そこで「Fプラン」では、「選択力」「社会力」「表現力」の三つの力の育成を目指し、1年生は「自分を知り、社会を知る」、2年生は「体験的に知を深める」、3年生は「知を総合化し、表現する」を目標として、3年間の系統的なプログラム（P.14図）を構築した。

進路を選ぶ力を付ける上で、学問や職業の知識は欠かせない。「Fプラン」でも系統的な職業研究や学部・学科研究を行うが、最も重要なのは、そのプロセスを通して生徒に「揺さぶり」をかけることだと、久保島昌一教頭は強調する。

「理想と現実の間で悩み、考える経験そのものが、生徒を大きく成長させます。葛藤の中で、生徒は自分と向き合い、時に妥協しながら進む道を選び込んでいくのです。葛藤の場面をいかに多く用意できるか、教師が意図的に仕掛けられるかという

視点で、進路学習を効果的に進める上で欠かせません」
葛藤するには、何よりもまず生徒が自分自身と向き合わなければならぬ。1年生の5月に行う「自分史ノート」は、小・中学校時代での「印象的な出来事・人物」「好きだったこと、興味があつたこと」「なりたかった職業」を書き、自分自身の歩みを振り返る取り組みだ。

「進路選択で大切なのは、何よりも自分自身に関心を持つことです。

特集 くり返し「考えさせる」進路指導

SPECIAL ISSUE

PROFILE

埼玉県立不動岡高校

◎1886年に私立埼玉英和学校として開校、1921年に埼玉県に移管され、48年に現校名に改称。2007年度に半期ごとに単位認定を行うセメスター制、65分授業を採用。08年度には進学重視型の単位制に移行し、生徒の志望に応じたきめ細かな教育を展開している。

設立 1886(明治19)年

形態 全日制・単位制／普通科・外国語科／共学

生徒数(1学年) 約360人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、金沢大などに81人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田大など延べ773人が合格。

住所 〒347-8513 埼玉県加須市不動岡1-7-45

電話 0480-61-0140

Web Site <http://www.fudooka-h.spec.ed.jp/>

図「F-プラン」の進路学習・小論文学習等

学年	学期	目標	実施事項
1年	前期	職業観・学問観の育成、自己理解	<ul style="list-style-type: none"> ・学習リサーチ ・自己理解「自分史ノート」 ・進路講話 ・入試研究Ⅰ ・職業研究
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・進路講話 ・入試研究Ⅱ ・学部学科研究Ⅰ
2年	前期	職業観・学問観の深化、自己探求	<ul style="list-style-type: none"> ・学習リサーチ ・自己理解「10年後の私」 ・卒業生との懇談会 ・学部学科研究Ⅱ ・修学旅行事前学習 ・大学見学会、報告会
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・教養講座 ・進路講話 ・入試研究Ⅲ
3年	前期	進路実現への努力、進路決定	<ul style="list-style-type: none"> ・個人研究(論文作成) ・卒業生との懇談会 ・受験校研究、入試研究Ⅳ ・進路講話 ・大学見学会 ・小論文実践指導
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・個人研究発表会

*学校資料を基に編集部で作成

土台となるのは、現在の自分です。

自分を理解しないまま、未来ばかりを考えさせたのでは、どこかに本当の自分がいると思いきや、どこかに本当の自分がないと、後悔を生じさせないためにも、自分を客観的に見つめる経験は必要です」(久保島教頭)

自己理解の過程で気付く、他者とのかわりも進路選択のポイントになると、進路指導主事の岩崎誠一先生は話す。

「『先生との出会いが人生を変えた』『看護師さんの優しさが励みになった』など、他者から喜びを与えてもらった経験は、前向きな人生観

を育み、進路を描く上でのロールモデルにもなり得ます。自分を見つめるだけではなく、他者に何が出来るのかという視点も持つてほしいと思います」

「10年後の私」で近い未来を考えさせる

「自分史ノート」を土台に高校卒業後を見つめるのが、2年生5月の「10年後の私」だ。「高校卒業時」「6年後」「10年後」に、それぞれ「自分はどういう生き方をしているか」「社会はどうなっているか」「自分の職業」という観点で未来を思い描かせる。

大学入学から就職まで綿密に計画を立てる生徒もいれば、大学卒業後がほぼ白紙という生徒もいる。「将来を見据えている生徒とそうでない生徒の差が顕著に出る取り組み」と、神田恵美子先生は指摘する。

「友だちが内心では真剣に将来を思い描いていることに衝撃を受けて、『自分も考えなければ』と思う生徒もいます。漫然と進路を考えている生徒にとっては大きな刺激になっていきます。ただし、この時点で『早く決めなさい』とは言いません。受験に向けて力を付けていくこの時期に、進路選択という現実と向き合い、葛藤させることが狙いなのです」

発表の場を与え知識のすそ野を広げる

「F-プラン」でもう一つ重視するのは、進路学習で得た知識やスキルを基に、考えを広げて知識を総合的に捉える体験である。

その体験に有効な手法がディベートだ。論理的な思考力や表現力、コミュニケーション力を付ける上で有効であり、テーマによっては社会や

理科など広範な知識が必要になるからだ。後藤範子先生は、テーマにかかわる講義を聞いたり、さまざまな文献を調べたりする活動を通して、「知識のすそ野を広げる」ことが重要であると言う。

「受験を意識するあまり知識を詰め込むだけで、生徒の学力は細くなっていると感じます。『F-プラン』の狙いの一つは、社会や人生を広く見せ、知識のすそ野を広げ、考える力を高めることです。例えば、一つのデータも反対側から見ると別の意味を持つということが理解できれば、社会に対するものの見方を養うことが出来ます。必ず訪れる進路選択の場面で、生徒自身がさまざまな知識を結び付け、総合的な知の土台をつくり、判断材料を増やすことが出来るようになる。そうすれば将来の展望も広がり、ひいては大学進学の学びへの意欲も高まるのではないかと期待しています」

発表の機会を設け、生徒に自信を付けさせることも、ディベートの狙いの一つだ。「自信を持たせ、進路を前向きに考えさせることも、『F-プラン』の

重要なポイントです。本校の生徒は中学時代には成績が良く、クラスで発言する機会も多かったと思います。しかし、高校で同じような学力の仲間と交わる中で、次第に自信を持ってなくなる生徒もいます。発表の



埼玉県立不動岡高校教頭
久保島 昌一 Kuboshima Shoichi
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「常に『複眼思考』」



埼玉県立不動岡高校
岩崎 誠一 Iwasaki Seichi
教職歴20年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「生徒の可能性を広げる進路指導を心掛けたい」



埼玉県立不動岡高校
後藤 範子 Goto Noriko
教職歴29年。同校に赴任して6年目。国際理解教育部主任。「いつも明るく楽しく！」



埼玉県立不動岡高校
寺田 弘 Terada Hiroshi
教職歴26年。同校に赴任して7年目。進路指導部。「今を生きる」



埼玉県立不動岡高校
神田 恵美子 Kanda Emiko
教職歴20年。同校に赴任して4年目。保健相談部。「その時に出来ることを悔い無きよう」(「ひとこと行っ」)

場を与えることで、『やれば出来るんだ』という手応えを感じてほしいと思っています」(岩崎先生)

論文作成を通して 自分自身と向き合う

「Fプラン」の最終目標は、体験的な学びを通して得た広い視野、さまざまな知識、将来の志望を総合化し、社会に出てからも通用する骨太の力を身に付けることにある。その集大成となるのは、3年生で行う「個人研究(論文作成)」である。4月下旬に志望に応じてテーマを設定し、半年以上かけて研究し、11月上旬に発表する。

生徒は自分で決めたテーマに基づいて文献に当たり、職業・社会研究等で得た知識や授業で学んだ内容を駆使して論文を書き上げる。成否の鍵となるのはテーマ選びだ。テーマが漠然としていたり、内容とずれていたりする場合は、担当がテーマの見直しや参考文献の再検索などを指示する。時には、一からテーマを練り直す生徒もいる。

生徒は論文作成によって学問を深めながら、実は自分と向き合っているのだと、後藤先生は言う。

「テーマを検討したり、研究を進めたりする過程で、自分の志望と志向のミスマッチに気付く生徒は少なくありません。同じ心理学でも臨床系と実験系ではまるで違うことに気付き、志望校を変更した生徒もいます。論文を作成する過程で、生徒は何がしたいのか、何になりたいのかということをも自分自身に問い掛けているのです」

「知の総合化」の経験が 進学後の伸びを左右する

「知の総合化」を体験させることの意義を、久保島教頭は次のように強調する。

「今の学問の潮流は、理系や文系を超えた『学融合』にあります。そうした動きに対応するためには、高校時代に、分野の違う、さまざまな知識を結び付ける経験が必要です。論文の巧拙自体はそれほど問題ではありません。知識を結び付ける経験

こそが、目的意識や進学後の伸びに大きく影響するのではないのでしょうか」

同校での進路学習の経験は、卒業後も心に大きく残るようだ。大学で卒業論文を書く際に振り返りをしたことから、自分の「個人研究」を見に来る卒業生がいたり、新入生に対して見本ディベートを行う際には発表者として卒業生が喜んで協力してくれたりするという。

今後の課題は、「Fプラン」に対する教師の意識共有である。進路指導部の寺田弘先生は述べる。

「学力には、目に見える力と目に見えない力があります。社会では後者の力がより求められますが、授業だけで身に付けさせるには限界があります。総合学習は、その突破口になると考えています。ただ、『Fプラン』が始まった当初とは教師も変わり、取り組みに魂が入っていないと感じる側面があります。生徒の状況を踏まえ、一つひとつの活動の目的や意義を改めて考える必要があると思います」



◎校訓は「自律・和敬」。師弟同行の課外講習、個別面談の充実など、生徒一人ひとりを大切にする教育を行う。学力の蓄積、進路意識の高揚を柱とするグローイングアップ・プランに取り組み、未来を切り拓く人材の育成を目指す。

設立

1975(昭和50)年

形態

全日制/普通科・理数科/共学

生徒数

1学年約200人

10年度入試合格実績(現浪計)

国立大は、岩手大、東北大、山形大、福島大、千葉大、東京大、岡山大、宮城大、高崎経済大などに110人が合格。私立大は、東北学院大、青山学院大、慶應義塾大、東京理科大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ241人が合格。

住所

〒982-0832
宮城県仙台市太白区八木山緑町1-1

電話

022-262-4130

Web Site

<http://mukaiyama.myswan.ne.jp/>

宮城県
仙台向山高校

進路学習の再構築

2年生での 「志望理由書」作成を軸に 生徒に徹底的に考えさせる

変革のステップ

背景

◎生徒の進路意識が希薄で、大学入学後の不適合が見られた。進路指導は体系的でなく、年度により進路実績に差があった

実践

◎「志望理由書」を軸とした「向陵プラン」で生徒の進路意識を醸成し、「進路シラス」で教師の目線合わせを行う

成果

◎生徒の進路意識が高まる。「向陵プラン」に意義を感じる教師が増える

STEP 1

STEP 2

STEP 3

進路意識の希薄化が
大学入学後の不適合を引き起こす

宮城県仙台向山高校が「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の改革に着手したのは、7年前のことだ。2004年度に赴任した三文字和史先生は、3学年担任として進路指導に当たるうちに、生徒の進路意識があまりにも希薄であることに気付いた。

「例えば、東北大の工学部に行きたいという生徒に、理由を聞いても明確な答えが返ってきませんでした。単なるブランド志向、あるいは偏差値や地理的条件に基づく大学選択に過ぎず、自分の将来まで深く考えていないことが分かりました」

ブランド志向でも志望実現に向けて最後まで頑張れるのなら良いが、そうではなかった。進路指導部長の高橋雅彦先生は、目的意識が希薄な生徒のもろさを指摘する。

「どうしてもこの大学に入りたいという強い動機があれば、勉強がたらくても頑張り抜くことができます。明確な志望理由がない生徒は、追い詰められると踏ん張り利かず、すぐに志望を変えてしまいます。また、目的意識が強い生徒は、入学した大学が自分のイメージと違って、良いところを探して適応しようとはしますが、そうでない生徒は『こんなはずではなかった』といって後悔する。充

実した大学生活を送るためには、「なぜ大学で学ぶのか」を知る必要があるのです」

課題は、生徒の進路意識だけではなかった。教師にも3年間を見通した進路指導の視点が不足していた。教師のスキルや意識によって指導が異なるため、進路実績は年度ごとに差があった。教育の質保証の面からも、生徒に大学で学ぶことの意味を理解させ、進学意欲を高める、体系的な進路指導の構築が急務となっていた。

大学合格だけでなく、社会に貢献できる人材の育成を目指す

同校は、進路指導改革として、まず総合学習



宮城県仙台台向山高校
高橋雅彦 Takahashi Masahiko

教職歴22年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「やれば出来る」ということを、生徒に伝えていきたい」



宮城県仙台台向山高校
三文字和史 Samonji Kazushi

教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導部副部長。「主体的に行動できる生徒を育てたい」



宮城県仙台台向山高校
穂積 暁 Hozumi Satoru

教職歴14年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。「困難を避けず、克服しようとする強い向上心を持った生徒を育成したい」

の見直しを断行した。進路指導部副部長の穂積暁先生は、当時の課題を次のように振り返る。

「それまでの総合学習は、模試の振り返りや進路講演会など、個々の指導は充実していたものの、単発の取り組みで終わり、生徒の意識を啓発しきれていませんでした。担任にとつても目標が見えず、徒労感だけが蓄積していくという状況でした」

こうした課題の下、3年間の総合学習を再構築した。それが「向陵プラン」である。大学合格だけを目標とせず、大学入学後に求められる力、実社会に貢献できる人材の育成を目指すプログラムだ。2年生の末に行う「志望理由書」の作成を山場とし、その前後で何をすべきかを考え、体系化していった。

1年生のテーマは「社会とつながる」とした。社会研究や職業研究などを行い、社会貢献の観点から職業とそれにつながる学問の意義を考える。そして、1年生での総仕上げと位置付ける「ウィンターセミナー」（2月実施）では、キャリア教育を支援するNPO法人の協力を得て、社会で活躍する50〜60人を講師に招き、生徒と語り合う場を設けている。

「社会人との対話を通して、自分も社会の役に立てるかもしれないという自己肯定感を育むことが狙いです。未来の自分に対して期待を持ち、進路に対する前向きな姿勢を育てたいと考えています」（三文字先生）

「志望理由書」の作成を通して将来の志望を焦点化する

2年生では「学問を知る」がテーマとなる。学部・学科研究で自分の関心のある学問分野について調べ、夏にはオープンキャンパスに行き具体的な大学像をつかむ。更に、大学教員を招いた「向陵セミナー」で学問分野に関する講演を聞いて志望分野への見識を深めてから、3学期に「志望理由書」を書く。

「志望理由書」は次の手順で作成する。まず第1志望の大学・学部・学科を決め、「志望するきっかけ」「学べる内容」「社会的な意義」など一問一答形式の「ワークシート」（P.18図1）に取り組む。12月にオリエンテーションを開いて書き方を指導し、年内に提出させる。担任は「志望理由が曖昧である」「学べる内容と社会的意義がずれている」など、生徒の理解が浅い部分をどんどん指摘し、何度でも書き直しをさせる。そして「ワークシート」が完成すると、それを基に800字前後の「志望理由書」を書く。もちろんここでも担任のチェックが入る。多くの場合、2回以上の下書きを経て、清書がようやく完成するのは年が明けて2月のことだ。

「生徒は3か月にわたり、自分の将来について悩み、調べ、考え抜く。担任との対話を通して、自身の志望を明確にしていく過程こそに意味があるのだと思います」（高橋先生）

図1 志望理由を書くための「ワークシート」

-12/21(月)提出
ワークシート①「志望学部・学科を選ぶ理由(根拠)を深める」
2年 組 番氏名

志望する学部・学科名

志望理由を持ったきっかけ

その学部・学科で学べる内容。

学問内容が社会にとってどのような意義(役割)があるのか。

具体的にどんなことを研究したいのか。

その他(取得できる資格、卒業後活躍できる分野や職業など)

* 学校資料をそのまま掲載

に挙げた学問分野に関する課題研究を行い、学問と社会のつながりを考え、自分の志望をより明確にすることが狙いだ。

研究テーマは、生徒が志望分野に基づいて個別に設定するが、内容が近い場合は、クラスを超えてチームを編成し、共同研究をする。他の生徒とテーマが重ならない場合は一人で研究に当たる。あくまで生徒自身

志望を絞りこんだ上で もう一度視野を広げる

と気づき、文学部から教育学部に変えたこともありました。大学入学後のミスマッチを未然に防ぐ意味でも『サクセスタイム』の意義は大きいと思います(高橋先生)

「向陵プラン」には、特筆すべき特徴が二つある。一つは、個々の取り組みが有機的に結び付いていることだ。取り組みごとに事前・事後指導があるのはもちろん、例えば、2年生の12月に行う「学問研究」は、10月の「向陵セミナー」の事後指導でもあり、12月に始まる「志望理由書」作成のための事前指導でもあるというように、取り組みを関連付けている。個々の取り組みの意義が明らかとなり、生徒も教師も徒労感を感じることなく前に進める。

もう一つは、志望の選択肢の広げ方にある。進路学習では多くの場合、広く社会や学問を見せた後、徐々に具体的な志望校を絞り込んでいく。一方、同校では、1年生で広く社会を見せた後、徐々に興味ある学問へと絞り込ませ、2年生末の「志望理由書」で自分の志望を焦点化する。その上で、3年生ではその大学にこだわらず、同じ目的が達せられる他大学・他学部へと視野を広げさせるのだ(図2)。具体的には、個別面談で生徒との対話を繰り返し、「サクセ

「提案型」ともいえる進路指導が、本校のスタンズです。生徒や保護者任せの『放任』でもなく、進学実績を達成するための『強制』でもありません。『なぜこのように考えるの?』『こういう道もあるよ』と、生徒にどんどん声を掛けます。さまざまな選択肢を提示し、漠然とした考えを整理させながら、最終的に生徒の主體的な決定を引き出していくのです(穂積先生)

課題研究で 生徒の学問への意欲を高める

3年生のテーマは「自分を知る」だ。「サクセスタイム」という取り組みの中で、第1志望

希望したテーマに取り組みのが基本である。4月に研究を始め、9月中旬に最終報告会を行うが、その3か月後の12月まで研究を深める時間を設けている。「もっと調べたい」という生徒の意欲に応えようと共に、研究はあくまで学問を深めるためにあり、報告会のためではないと意識させる工夫でもある。

「サクセスタイム」は、自分の志望が将来の夢や希望する職業と合致しているのかを確認する機会にもなっている。

「研究を進める過程で、『志望理由書』に挙げた志望を変える生徒が出てきます。課題を調べるうちに、志望と『社会の課題』とのずれを認識するのです。心理学を希望していた生徒が、自分の興味が本当は教育分野にある

図2 進路選択の焦点化と広がり



スタタイム」で隣接する諸分野まで視野を広げた後、最終的に入試前の「ケースタディー」で、「センター試験で目標点に達した場合」「達しなかった場合」など、状況別に出願校を考えておき、幅広い選択肢を用意して受験に臨む。

「目的意識を明確にすることは重要ですが、第1志望校にこだわりすぎてかえって視野が狭くなり、本来の目標を見失ってしまう生徒も出てきます。『志望理由書』で明確にした将来の希望や学びたい学問に基づいて、第1志望校以外にもさまざまな選択肢があると気

付かせることが大切なのです」(三文字先生)

「なぜその学問を学びたいのか」という強い問題意識を持っていけば、センター試験の自己採点結果が第1志望校の目標点に届かなかったとしても、前向きな気持ちで第2、第3志望校に向かっているのである。

「進路シラバス」と「進路だより」で教師の目線合わせを促す

綿密な指導計画を構築しても、直接指導にか

かわる担任の意識が低ければ、効果は望めない。取り組みの意図を正しく担任が理解し、学校全体で進路指導スキルを高めるために、同校では10年度に「進路シラバス」を作成した。これは、3年間のすべての進路指導を「学力蓄積に関する取り組み」(実力テスト、土曜学習会など)、「進路意識の高揚に関する取り組み」(向陵プラン)、「指導充実に関する取り組み」(学習記録、個人面談など)に分けて、目的と内容を示した資料である。特徴は、「関連する取り組み」の欄を設け、1年生の「社会研究」と「ウインターセミナー」、2年生の「向陵セミナー」と「志望理由書」というように、個々の取り組み同士の連関を一目で分かるようにしたことだ。

「目的とゴールに至るまでの道筋を示すことが、先生方の意欲を高め、徒労感を減少させるのではないのでしょうか。また、『進路シ

ラバス』は、本校の教師ならここまで指導してほしいというスキルの目安でもあります。本校が保証する進路学習のスタンダードであるという意識を教師全員が持って取り組んでほしいと思っています」(高橋先生)

生徒に週1回配布する「進路だより」は、教師間の目線合わせのツールとしても活用している。生徒向けに時期に応じた課題や取り組み内容を記したものが、教師もそれを見れば、生徒が今どういう状況にあり、どのようなアドバイスをすべきかが分かる。

改革に着手して7年。生き生きと進路学習に取り組む生徒の姿を見て効果を実感する教師も増え、取り組みに対する教師の理解は深まりつつある。今後の課題は、取り組みを形骸化させず、いかに次代へと継承していくかだ。

「生徒は年ごとに変わっていきます。3年間の指導計画は整いましたが、生徒を見ずに形にばかりこだわっていたら、すぐに取り組みは形骸化してしまうでしょう。生徒の実態に合わせて取り組みを不断に見直す努力が必要なんです。そのためには、入学時から生徒の進路意識をきちんと把握しておくこと、そして何よりも、なぜ進路学習が必要なのかという『魂』を伝えていくことが大切ではないでしょうか」(穂積先生)

「向陵プラン」の真価は、これからの教師たちの取り組みにかかっている。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「新潟県立高田高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎1946年に桜映女学校として開校。51年に修道院「幼きイエズス修道会」に経営移管し、4年後に現校名に改称した。高校は難関大を目指す「特進コース」と、国公立大・私立大を目指す「学際コース」の2コース制。英語教育に力を入れ、ホームステイや各種留学制度を充実させている。

設立
1946(昭和21)年
形態
全日制／普通科／女子
生徒数
1学年約240人
10年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、名古屋大、京都大、大阪大、奈良女子大、和歌山大、和歌山県立医科大などに計85人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ429人が合格。
住所
〒640-8151 和歌山県和歌山市屋形町2-22
電話
073-424-1141
Web Site
http://www.shin-ai.ac.jp/

和歌山県・私立
和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校

SIの再定義

学校のアイデンティティー 確立と手を掛ける指導で 進学校へと脱皮

変革のステップ

背景

◎生徒の学力を伸ばし切れず、明確な指導方針を見いだせていない中、学校全体が閉塞感に覆われていた

STEP 1

実践

◎徹底した提出物の管理、小テストの繰り返しなどにより学力向上。SIの再定義により教師のモチベーションがアップ

STEP 2

成果

◎旧帝大を含む2桁の国公立大合格者を出す進学校に。成功体験を通して教師の結束も強まる

STEP 3

**明確な指導目標が見いだせず
学校が閉塞感に包まれる**

和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校は、和歌山市中心部にあり、カトリックの中高一貫の女子校として長年、良妻賢母の教育を行ってきた。その同校が進学を重視し始めたのは、15年ほど前のこと。背景には、学校をとりまく閉塞感があった。進路指導部長の山内義正先生は、当時の状況を次のように振り返る。

「本校はシスターが経営する女子校として生活指導面で定評があり、安心して子どもを預けられると、保護者から厚い信頼がありました。ただ進路に関して指導目標が明確でなく、生徒にどのような力を付けたいのか、どのような進路を実現したらよいのかということに、教師は無頓着でした。生徒の約半数が併設の短大に、成績上位の生徒は指定校推薦でカトリック系の私立大に進学と、生徒も教師も力を出し切れませんでした」

周辺の私立高校に合わせ、1990年度に特進コースを設置したものの、入学段階でコースを設定したわけではなく、中学2年生の時点で成績の良い生徒を集めて1クラスつくっただけであった。受験に対応した進路指導や教科指導についてのノウハウはなく、指導は手探り状態。特進コースの担任が英語科だったこともあり、まずは英語を中心に小テストを頻繁に行い、

基準点に達するまで追試を繰り返した。課題の提出も徹底させたが、果たしてこれで生徒の力が伸びるのか確信が持てないまま、特進コース1期生は高校3年生となった。

特進コースの躍進により 進学校への一歩を踏み出す

そうした中、同校に転機が訪れる。柳岡克己教頭は当時を次のように振り返る。

「どのような方針で大学入試に向かえばいいのか悩んでいた時、知り合いの進路指導経験の豊富な教師から、『進路指導は生徒の可能性を信じて、背中を押してあげることだよ』



和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校教頭
柳岡克己 Yanaoka Katsumi
教職歴・赴任歴共に33年。「良き仲間と仕事が出る幸せを大切にしたい」



和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校副教頭
紙岡 智 Kamioka Satoshi
教職歴25年。同校に赴任して24年目。入試対策室長。「しんどいことを明るく行う」



和歌山信愛女子短期大学附属中学・高校
山内義正 Yamauchi Yoshimasa
教職歴23年。同校に赴任して22年目。進路指導部長。「努力を惜しまず、やるだけやったら『あとは野となれ山となれ』

と言われました。推薦入試中心の進路指導に慣れていた私たちにとって、一般入試で勝負をさせることは挑戦でした。進学重視の学校改革を疑問視する教師がいる中で、1期生で結果を出さなければ本校は変わらないという危機感を強く持ち、理事長や校長の『やつてみなさい』の声を頼りに勇気を出して、一般入試中心の指導にかじを切りました」

「生徒に危ない橋を渡らせるわけにはいかない」「指定校推薦入試は生徒の権利である」と、それまで通り推薦入試を薦める教師もいた。また、特進コースの生徒や保護者の中には、「ほかのコースの生徒は推薦入試を受験できるのに、自分たちはどうして受験させてもらえないのか」と詰め寄る者もいた。

しかし、ここで改革を後退させるわけにはいかない。当時、学年主任だった柳岡教頭をはじめ改革を進めていた教師たちは、意を決して一般入試を中心とした進路指導を断行した。実績のある学校を訪問したり、模試の活用方法を学んだりしながら、進路指導のノウハウをつかみ、課題提出の厳守や小テストの基準点クリアなど、当たり前のことを徹底した。

3年目には、大阪大などの国公立大に20人が合格した。その中には、特進コースの生徒に刺激を受けた一般クラスの生徒もいた。柳岡教頭は、1期生の実績（国公立大14人）が教師の意識を変え、同校の改革を後押ししたと強調する。

「意識改革を進めるためには、一般クラスの生徒でも国公立大に入れる力が十分にあることを証明する必要があります。生徒の可能性を信じて何が何でも重要だと伝えられたのです」

特進コースの成功体験を 学校全体の改革につなげる

特進コース1期生の合格実績が大きな一歩となり、同校は進学校に向けた改革を本格的に進めた。改革に懐疑的だった教師たちも、「自分たちにも出来るかもしれないか」と思うようになっていた。「数学をもっと伸ばせないのか」など、個々の教科への期待も日増しに大きくなり、教科間で率直に意見をぶつけ合うようになった。また、前学年に負けるわけにはいかないという、良い意味でのライバル意識が出て、おのずと教師たちは切磋琢磨するようになった。

しかし、試行錯誤は続いた。特進コース1期生の指導を「成功事例」とし、次の学年では学校全体で試みたが、特進コース以外の生徒は、宿題の多さについてこれなかったり、度重なる追試に音を上げたりと、指導に乗り切れない生徒が多かった。紙岡副教頭は次のように語る。

「成績上位層に対して行っていた指導を、一般クラスの生徒にも取り組ませたために、消化不良を起こして、うまく成果が出ていま

せんでした。そこで、同じ量をこなすにして
も方法を変え、1回のテストの範囲を減らし
て回数を増やすなど、各教科が生徒の実情を
見ながら試行錯誤をし、少しずつノウハウを
蓄積していきました」

各教科が成果を出そうと意識するにつれて宿
題の量が急速に増えたため、その調整も課題と
なった。生徒に聞いてみると、多い時には英数
2教科だけで1日6時間をかけないと終わらな
いほどの宿題が課されていたことが判明した。
「これでは生徒がつぶれてしまう」と、早急に
教科間で話し合い、平日は全教科合わせて2〜
3時間程度で出来る量に調整するようにした。

中高入試の低迷を契機に 自校のS-Iを再定義する

順調に進学実績を上げ始めた同校であった
が、すぐに一つの壁に突き当たる。「出口」の
大学入試で実績が開始したにもかかわらず、「入
口」である中高入試では、期待したほど学力の
高い生徒が集まらなかったのである。そこで、
同校は進学実績向上の改革と並行して、募集戦
略の練り直しにも着手する。

そのためには、学校の特色を明確化すること
が重要であった。ところが、学校の魅力を考え
始めた時に、同校ならではの問題に気づく。

「本校はカトリックの学校で、シスターが

校長を務め、宗教の授業や宗教行事があり、
朝の祈りもします。しかし、カトリックとは
何なのか、それが本校の教育にどう結び付い
ているのかということに、明確に答えられる
教師はいませんでした。教師のほとんどはキ
リスト教徒ではないということもあり、カト
リックの学校に勤めながら、その意味を深く
考えることがなかったのです」(柳岡教頭)
カトリックの学校であることを、もっと大切
に考えないといけないのではないか……。こう
した課題意識の下、司祭(神父)を招いてカト
リックの講義を聴く研修会が始まった。

「カトリックでは見返りを求めず、自らの
時間、体、心を裂いて人に与えるということ
が大切とされています。カトリック校の教師
も自らを裂いて、預かった生徒たちを育てる
のが我々の仕事だと再認識しました。そこで、
生徒を確実に伸ばすという決意を込めて、『育
成型教育』を本校の教育の特色として打ち出
すことにしました」(柳岡教頭)
この研修は、スクール・アイデンティティ
(S-I)の再定義にとどまらない意識改革を教
師にもたらした。

「それまでは、進路指導に偏りすぎると生
徒の人間性を損なうのではないか、という課
題意識を持つ教師もいました。しかし、神父
やシスターと話すうちに、進路指導に力を入
れることによって生徒が力を伸ばすことが出

来るのであれば、それは本校の教育として必
要なことなのだと思うようになりました。生
徒一人ひとりがタレント(神から与えられた
能力)の持ち主というキリスト教の考えがあ
るからこそ、安心して思い切つて生徒にぶつ
かり、その力を伸ばしていくのだと、教師間
で共有することが出来ました」(山内先生)
この研修は、すべての教師が2年に1度は参
加できるよう、年2回実施している。教師全員
が自校の教育について考える機会を持ち、課題
意識を持って日々の教育に取り組むことで、高
いモチベーションが維持されるのである。

「2人担任制」により 教師集団に一体感

教師が手を掛ければ掛けるだけ生徒は育つ。
進学実績が上がるにつれて、教師も生徒を育て
ることの楽しさ、やりがいによって気づくよう
になっていった。

「以前に比べ、確実に忙しくなりました。
しかし、今は学校はこんなに楽しいところな
のか、教師とはこれほどやりがいがある仕事
なのかということを感じることが出来ます。
それは、生徒の成長があるからこそ実感でき
るものなのです」(柳岡教頭)

生徒の伸びを因るための、独自の「UD指数
(*)」という指標も開発した。これは、例えば



年4回の成績会議とその目的(3学年)

6月	マーク模試の結果を受けて教師同士が目線合わせを行う。生徒一人ひとりの志望校や将来の夢、性格などを確認し、大まかな指導方針を立てる
8月	2学期の進路指導に当たり、推薦入試、一般入試の方針を確認する
10月	志望校や将来の夢、性格に応じて、より詳しく志望校を絞り込む。この時期は推薦入試などで生徒が動揺しがちで、教師にはプレッシャーが強くなるので、受験の方針を複数の教師の目で再確認する
1月	センター試験の結果を元に、最終的な出願先を決定

*学校資料を基に編集部で作成

ある回の進研模試で偏差値60を超える集団の数を1とし、半年後の模試でその人数が増えれば1以上、減っていれば1未満というように、学力の推移が一目瞭然に示されるデータである。生徒の学力の伸びに責任を持つという、教師の決意が込められている。

4年前から、校長の発案で2人担任制としたのも、より多くの教師で一人ひとりの生徒を見ていこうという意識の表れだ。男性と女性、ベテランと若手、優しい教師と厳しい教師など、タイプの異なる教師がペアを組み、共同で学級経営に当たる。

生徒一人ひとりに応じたきめ細かな進路指導を目指す

「生徒と教師にも相性があります。2人担任制は、生徒との関係性を築く上でも重要ですし、教師が互いに相談できるので、それぞれ心強く感じているようです」(紙岡副教頭)

2人担任制は、教師の間に一体感が出るという効果も生んだ。担任と副担任という関係とは違い、責任が対等である上、担任が1人でクラスを抱え込むことがない。職員室で生徒について話し合う担任が1組、2組と増えていくうちに、会話の輪が広がり、職員室全体が気軽に情報交換できる場へと変わっていったのである。

09年度には「成績会議(志望校検討会)」を始めた。開催は、3年生の6月、8月、10月、1月の年4回だ(図)。成績会議の意義を山内先生は次のように話す。

「成績会議は教師のための会議ともいえます。年4回、教師の気持ち揺らぎそうな時期に今一度、しっかりと目線合わせをするという意味があるのです。これにより、安心して指導に臨めるだけでなく、経験の浅い教師へのノウハウの継承にもなっています」

志望校や進学先を決める際は、合格可能性だけでなく、入学後にどれだけ生徒を伸ばしてくれる大学なのか、その生徒の性格や将来の希望

に合っているのか、といった点も考慮する。

「大阪府立大と関西学院大で迷ったら、おとなしい性格の生徒なら少人数教育の充実している大阪府立大へ、活発で海外で活躍したいと思っている生徒なら関西学院大へというように、生徒一人ひとりの特性に合わせた指導を意識しています。医学系や工学系は女子学生の就職先が充実している大学なのかといった観点で大学を吟味するなど、女子校としての進路保障にも力を入れています。単に合格させるための指導ではなく、大学入学後を見越した進路指導を心掛けてこそ『育成型教育』であると考えています」(紙岡副教頭)

今後の目標は、東京大や京大などの最難関大に毎年複数人の合格者を出すことだ。そのために同校が重視するのは「生徒の自立」である。

「教師の手厚い指導とそれに応える生徒の頑張りにより、国公立大や関西圏の難関私立大にコンスタントに合格者が出るようになりました。しかし、更なる上の目標を実現させるためには、生徒自身が自分の弱点を見つけ、それを自らの方法で克服していく『自立型の学び』にシフトしていかなくてはなりません。その時に、私たち教師はどのような支援が出来るのが、今、本校に問われている課題です。生徒のために何が出来るのかを第一に考えながら、我々自身も、生徒と一緒に成長していきたいと思っています」(柳岡教頭)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年10月号指導変革の軌跡「大阪府・私立追手門学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎普通科高校として開校、2010年度で創立31年目を迎える。2003年度から学年進行で総合学科へ改編。「知と愛と和と」を校訓とし、夢の実現に向けてたくましく挑戦し続ける生徒の育成を目指す。文武両道を校是とし、過去にバドミントン、卓球、柔道、空手道部の4部が全国制覇を果たした。

設立	1979(昭和54)年
形態	全日制・単位制／総合学科／共学
生徒数	1学年約240人
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、山形大、群馬大、宇都宮大、茨城大、東京海洋大、新潟大、信州大、山梨大、金沢大、富山大、大阪大、神戸大などに63人が合格。私立大は、学習院大、中央大、法政大、明治大、同志社大、立命館大などに延べ334人が合格。
住所	〒371-0002 群馬県前橋市江木町800
電話	027-263-2855
Web Site	http://www.gsn.ed.jp/gakko/kou/maehigasi/

群馬県立 前橋東高校

進学実績の向上

生徒の進路意識の涵養と 教師の指導力向上で 「進学型総合学科」を実現

変革のステップ

背景

◎志望校は県内の大学に偏る傾向に。教師側の進路指導の経験不足もあり、進学実績が頭打ちになっていた

実践

◎「産業社会と人間」で進学意欲、土曜補習で基礎学力の向上を図る。「志望校検討会」などで教師の指導力向上を目指す

成果

◎生徒の進学への意識が高まり、国公立大合格者が過去最高を記録。教師間の意思疎通が進み、結束力が強くなる

**進路指導のノウハウの蓄積がなく
挑戦する心を育てられない**

群馬県の中南部にある群馬県立前橋東高校は、進学重視の全日制総合学科の学校だ。2003年度に総合学科に改編以来、毎年40人〜50人前後が国公立大に合格してきた。しかし、08年度に赴任した山口和士教頭は、生徒の志望先が限られており、高い視点で力を伸ばし切れていない現状にもどかしさを感じていた。

「生徒は素直で学力も高く、教師もまじめで一生懸命でしたが、より高い目標に進む意欲は双方とも希薄でした。生徒の多くが国公立大志望としつつも、その内実は本人も保護者も『県内の国公立大で十分、それが無理なら県内の中堅私立大に』というものでした。これまでの経験から、本校の生徒なら全国の国公立大に100人は入れるのではと歯がゆい思いでした。進路指導は学年主導で、担任は生徒や保護者の希望に沿う形で指導を行うため、視野を広げ、高い目標に挑戦しようという意欲までは引き出せていませんでした」

特に課題に感じたのは、進路指導に関する教師の経験とデータ不足だ。進路指導室には使われた形跡のない資料がたくさんあり、模試や入試のデータは学年団で管理していたため、進路指導部として十分な蓄積がなかった。群馬大と偏差値が10も差がある県内の私立大を併願とす

る生徒に、適切な指導が出来ない状況だった。生徒も教師にも力はある。進路指導のノウハウが足りないだけならば、発想の転換と現状分析に基づいた工夫で学校を変え、生徒の力を伸ばすことが出来るようになるのではないか。この思いが、改革の出発点となった。

「産業社会と人間」「進路プランニング」で生徒の進学意欲を高める

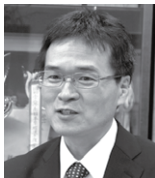
改革に当たり、同校が意識したのは総合学科



群馬県立前橋東高校校長
吉田シヅエ Yoshida Shizue
教職歴28年。同校に赴任して1年目。県教育委員会指導主事、藤岡女子高校校長、太田高等養護学校校長を歴任。「Nothing venture, nothing gain」



群馬県立前橋東高校教頭
山口和士 Yamaguchi Kazushi
教職歴31年。同校に赴任して3年目。「新しい時代を拓くために、生徒に日々勇気を与え、指導していきたい」



群馬県立前橋東高校
奥田直紀 Okuda Naoki
教職歴24年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「生徒の話によく耳を傾け、啜啄同時の大切な時期を逃さないような指導を心掛けたい」



群馬県立前橋東高校
菅原直紀 Sugawara Naoki
教職歴22年。同校に赴任して4年目。進路指導部進学主任。「生徒の高い進路希望の維持と実現のため、主体的・自主的な活動姿勢を育成したい」

の特徴を最大限に生かすことだ。総合学科は科目選択の幅が広いため、生徒それぞれの選択を尊重しつつ、大学合格実績を上げるには工夫が必要となる。

まず、1年次必修の「産業社会と人間」を活用することにした。社会や大学についての調べ学習を通して、調査能力や課題発見・解決能力を高め、進学意欲の向上を目指す「進路プランニング」というプログラムを推進した。

「進路プランニング」は、①大学・企業見学、②進路講演会、③オープンキャンパスへの参加、④体験講義の四つの体験学習から成る。1年次の終わりに「私の進路プラン発表会」として、体験学習を基に自分の夢について、パソコンを使ってプレゼンテーションする。ポイントは、1年間かけて大学や企業について調べ、働くことの意味などを考えさせながら、2年次以降に選択する科目と進路との関連を調べさせていることだ。進路指導主事の奥田直紀先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、早々に少ない科目で受験する安易な道を選ぶ傾向にありました。大学入試について深く考える前に科目選択をしてしまったため、志望校を決める段階になって必要な科目を履修していないと分かり、志望校を変えざるを得ないという生徒もいました。自分の夢を実現するための大学・学部はどこか、そこに入るために必要な科目は何かとい

うことにまで視野を広げさせることで、学びへのモチベーションを高めると共に、幅広い進路選択の可能性を担保できると考えています」

普通教科の中でも生徒の学力をもっと伸ばせるのではないかと、山口教頭は考える。

「例えば、進路指導では、一般的に保健体育や家庭基礎などの科目は重視されにくい状況にあると思います。しかし、入試でもよく取り上げられる高齢化問題や環境問題といった今日的な課題は、それらの教科に内包されます。一見、受験には関係ないと思える教科から理科や現代社会への興味につながり、小論文対策ともなり得るのです。総合学科でも少し発想を変えれば、授業の中で生徒の力をもっと伸ばせると考えています」

6教科の土曜補習で全学年に学校で学習できる環境を確保

進路意識の醸成と並んで重要なのは、言うまでもなく基礎学力の向上だ。同校では全校を挙げての土曜補習で、その実現を図っている。

「本校の生徒は、学校への信頼度が高く、自ら学習に取り組む姿勢は弱いものの、与えられた課題には素直に取り組めます。自主的な家庭学習はもう一歩ですが、生徒の多くが大学進学を希望している。であれば、我々の

夢の実現へ向けて(志望大学合格)

夢への挑戦

- 受験科目と受験情報の確認・対策
- 課題研究(高校生活総集編としての論文作成)
- 小論文(問題意識・表現力の構築)

ジャンプ

3学年 進路プランニングⅢ

自己実現志向の発展 「総合的な学習の時間」の活用

社会で求められる力の認識

- 「科目選択を考える」コンセプトの下、自身の進路と選択する科目との関連を調べる。社会で必要とされる力を知る。
- 科目選択を考える
 - 受験科目調べ(第1志望大への道の確認)
 - オープンキャンパスへの参加(本物を知り・未来を見る)
 - 進路講演会(将来に向けての確認)
 - 体験講義(大学の先生方の授業体験、現実を見る)
 - 小論文(大学の個別学力試験を知る)

ステップ

2学年 進路プランニングⅡ

自己実現志向の伸長 「総合的な学習の時間」の活用

可能性の探求

- 社会や大学について調べ、体験学習を通して、働くことの意味を考える。2年次に夢の実現に必要な科目選択が出来る素地をつくる。
- 科目選択を考える
 - 大学見学(早期の目標設定のために)
 - 企業見学(大学の先の社会を展望)
 - 進路講演会(将来へ向けての指針)
 - 「私の進路プラン」発表(さまざまな進路プランに触れる)

ホップ

1学年 進路プランニングⅠ

自己実現志向の育成 必修科目「産業社会と人間」の活用

*学校資料を基に編集部で作成

すべきことは一つ。きちんと学習できる環

境を学校内に確保することです」(山口教頭)

土曜補習は原則全員参加で、正課に準ずる取り組みだ。毎週土曜日、午前中に3コマを使って補習に取り組み、午後は部活動を行う。対象教科は国・数・英・理・地歴・公民の6教科で、いずれか3教科を各1コマ、週ごとにローテーションを組む。すべての学年で、出席率は毎回9割を超える。

土曜補習を導入したのは3年前だが、当初は

さまざまな困難があった。

「どの生徒にとっても重要な教科で基礎力を付けることを目的として、1、2年生の英語で始めました。ただ、英語科の中でも土曜に補習を行うことに疑問を抱く教師は多く、更に部活動との兼ね合いもあったため、教師間で共通認識をなかなか持てませんでした。しかし、話し合いを繰り返しながら補習の体制をつくっていったところ、英語の成績が伸び始めたのです。これを契機に、教師が手を

掛けて生徒を伸ばすことの重要性を実感でき、学校全体で補習に取り組もうという共通認識が持てました」(奥田先生)

保護者からも「1教科のためにわざわざ登校させるのはもったいない」という意見が出てきたことから、08年度には国・数・英の3教科に拡大、09年度には理・地歴・公民も追加し、今年度には3年生も加えて、全学年体制で土曜補習を実施している。

ただ、保護者の後押しがあったとはいえ、越えなければならぬハードルはいくつもあった。まず、生徒を全員参加にすることに對する部活動顧問の懸念については、午前中は学習させ、午後は部活に専念させる、大会や遠征がある場合はそちらを優先させるなど、部活動と補習のすみ分けを明確に行い、両立することで了解を得た。

また、部活動にかかわる出張者が大勢いた場合、補習を担当する教科の教師をどう確保するかという問題もあった。各教科に理解を求め、学年を超えて、教科で全学年に対応するという方策で解決を図った。吉田シヅエ校長は、その思いを次のように語る。

「困難はありますが、それに負けていたら前には進めません。本校には、部活動にも懸命に取り組む生徒が多くいます。子どものために学習も部活動も頑張れるような環境を整えるのが、私たち教師の役目だと思います」

「志望校検討会」での成功体験を通じ 教師の指導力が向上

生徒の進路意識の向上、基礎学力の定着と並んで重要なのは、教師の指導力向上だ。鍵になる取り組みは、「志望校検討会」と「教科ヒアリング」である。

それまでの「志望校検討会」は、生徒の成績に応じて最終的な志望校を絞り込む会議になっていたが、08年度から生徒の可能性を広げる場を一新した。初年度は、進学校での指導経験がある教師が会議を主導。240人の生徒一人ひとりを年数回検討し、併願校の選び方、推薦入試やAO入試での合格可能性、生徒の伸びしろの見極めなど、検討会の進め方を実践してみせた。2年目からは学年団主導に移行したが、前年の経験者若干名を3年次に残すことでノウハウの継承を図ることも忘れなかった。

「昨年、偏差値が及ばない東京の国公立大を志望した生徒がいました。検討会では受験させるかどうか意見が割れましたが、結果的に、徹底的に指導し、AO入試にすべてをかけることに決まりました。模擬面接や『進路プランニング』での大学研究を通じて、生徒は力を付け、見事合格を勝ち取りました。この経験によって、我々の指導で十分に国公立大を狙える、力が伸び悩んでいる生徒でも指導次第で高い目標を実現できるという自信

を、先生方は持てたと思います」（山口教頭）
「成功体験」を通して成長するのは、生徒だけではないのだ。

「教科ヒアリング」で 教師同士が自由に語り合う

10年度から実施している「教科ヒアリング」も、教師の指導力や意欲を高める上で欠かせない取り組みになりつつある。吉田校長が、7月に通常の教科会議の時間を利用し、教科担当者を一堂に集めて教科の課題を共有し、今後の解決策について自由に語り合う場を設けた。

一般的に、こうした会では教師が委縮して発言が滞る場合が多いが、若手教師も積極的に発言するなど、予想以上に活発な意見交換がなされたという。物理担当として理科の「教科ヒアリング」に出席した進路指導部進学主任の菅原直紀先生は、次のように取り組みを評価する。

「先生方にはそれぞれ胸に秘めた思いがあったものの、それを発信する機会がなかったのだと思います。ヒアリングでは3年生に対する指導が議題の中心になりました。1、2年次の先生方も参加することで、来年、再来年に向けての現在の指導方針・指導法を確認すると共に、教科全体で3年生を支援していくという意識も生まれたと思います。また、自由に語り合う体験を通して、教師間の風通

しも良くなり、職員室などでの日常的な情報交換も活発に交わされるようになりました」
改革から3年。その成果は国公立大合格者数の増加にも表れている。09年度入試では東北大を含む55人が合格、10年度入試では大阪大、新潟大医学部を含む63人まで伸び、普通科時代を含めて過去最高の実績となった。更に、教師の意識も大きく変わった。

「誰かが一声掛ければ、すべての教師が迅速に動くというフットワークの良さが出てきました。過去3年間、土曜補習の是非などで議論を交わしてきたことが、結果的に教師の結束を強めたのだと思います」（奥田先生）
今後の課題は、教師間、分掌間の力を結びつけ、「組織として機能する学校」へと進化させていくことだと、吉田校長は話す。

「先生方は皆、能力が高くまじめです。しかし、個々の取り組みが『点』で終わってしまっただけ、効果は限定的になってしまいました。教師、教科、分掌が有機的に結びつくことで、組織全体の力が高まると考えています。『志望校検討会』や『教科ヒアリング』などを通して、先生方は組織的に動くことの大切さを実感し始めていると思います。個々の取り組みの効果を更に高めるためにも、先生方の力を結集して、機能的な組織を構築していきたいと考えています。それが実現できたとき、本校は大きな躍進を遂げると信じています」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「**大分県立日田三隈高校**」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

生徒と教師の助走期間としての 3年生0学期の意識付け

2年生3学期を3年生0学期と設定する意味はなにか？

単なる時間の先取りではなく、

「この時期だからこそ始める」という意味を生徒、教師双方が確認し、
生徒と教師の行動が変わる「確かな助走期間」としての意識付けを行いたい。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

3年0学期の指導の重要性を具体的に把握するために

図1 3年0学期学年団の指導の目線合わせシート

ダウンロード

	学校全体の動き	担任の動き	指導のポイント	
高2 12月	志望校調査	面談	<p>●3年生0学期の意識付けを開始する</p> <ul style="list-style-type: none"> 受験直前に「あと3か月あれば!」と後悔しないために2年生1月から3年生0学期が始まることを説明する 校外模試、センター試験への挑戦で入試を肌で感じ、理解させる 教師自身が入試研究に取り組み、3年生(0学期)に合った指導の準備を行う 	
3年0学期	1月	志望校仮設定	<p>●入試と授業のつながりを理解させる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己採点を通してこれまでの授業内容だけでセンター試験で6割は得点できることを実感させ、授業中心の学習計画を立てさせる 校外模試や実力テストの出題ポイントがセンター試験と重なっていることに気付かせる センター試験への挑戦で自信を失った生徒に対しては、2年生の学習範囲から出題されるマーク模試をうまく活用し意欲を高めたい 校外模試の成績票の返却に合わせて、生徒の学習状況を改めて確認する <p>●基礎固めを徹底させる</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内テストや校外の基礎学力テストなどを利用して、1月からの学習の成果を検証。「やったら出来た」を実感する場をつくる 安易に目標を下げさせない一方で、選択肢を広げるために第2志望を意識させる 特に難関大志望者には高い目標に見合った強い意識付けを行う 	
	2月	センター試験への挑戦 ・自己採点 ・学習計画作成		面談
	3月	校外模試 ↓ 成績票返却		面談
	校内模試、スタサポなど	面談 (特に難関大志望者)		
	志望校調査			
高3 4月	進路講演会		<p>●6月の模試を天王山と捉える</p> <ul style="list-style-type: none"> 受験校選択やその後の受験対策に大きな影響を持つ6月の模試を目標に学習を進めるように意識付けをする 2年までの学習範囲の復習は出来るだけ6月までに終了させる 	
	面談週間	面談		
5月		保護者懇談		
6月	校外模試	面談		

1

【教師間でのデータ活用】
取り組みを有機的につなげる3年0学期の目線合わせ

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラス α の指導

「やれば出来る」から 「やったら出来た」へ

授業を大切にすることで入試対策の土台が出来ることを生徒に納得させるためには、授業を大切にすれば成績も上がったという経験、つまり「やったら出来た」という経験が必要だ。2、3月に基礎学力の定着を測るテストを実施するのが最適だが、それがなければ授業前に小テストを実施するなど工夫し、成功体験を積ませたい。一方で、「やってもうまくいかない」生徒も確実に存在する。そうした生徒には「今の失敗経験があるから、入試前に慌てずに済む」とフォローした上で、改善策と一緒に考えていく。

2年生は個人が 団体をつくる時期

2年生は部活動の内容により、個々の生活状況が多様で、一律の指導で対処するのは難しい。2年生は、個々に合わせた自律指導の総体としてクラスを運営し、「個人が団体(クラス)をつくる時期」と捉えたい。一方3年生は、部活動を引退すれば入試という目標で目線が合うため、一斉指導の効果を発揮しやすくなる。不安と戦うためにクラスの勢いを支えるなど「団体が個人をつくる時期」とも言える。2年生と3年生では進路意識や日々の学習への取り組み、生活実態が大きく異なることを念頭に置いたクラス運営を心がけたい。

各教科の担当者からも 処方箋を出す

この時期、各教科担当と生徒が関係を築いていくことも必要である。例えば、生徒の中には教科内容の質問で職員室を訪れたことがない者もいる。そこで「3年生になっていきなり質問に行くのではなく、今から職員室に質問に行く習慣を身に付けよう」と担当が声を掛ける。同時に、学年団でもそれぞれの生徒に対して、どのような学習が必要なのか、教科担任からもアドバイスをしよう促していく。

活用後のフォロー

◎3年生0学期の取り組みは、次年度の3学年団に引き継いでいく、ある意味、先行投資型の指導である。そのため、その成果を2学年団が検証できるとは限らない。しかし、だからこそ、学年主義にとらわれず、学校全体の取り組みとして形作っていく意識が必要だ。まずは、**図1**を進路指導部のデータフォルダなどに残し、随時改訂を加えるなど、以降の学年に確実に引き継げるようにしたい。4月から生徒を引き継ぐ3学年団も、折に触れて**図1**を確認し、目の前の生徒がどのような指導を経てここにいるのかを理解していく。生徒の成長を指導の連続性の成果として俯瞰する視点を教師が持つことで、その学校ならではの指導が継承されていくことになる。

データ活用
のねらい

3年生0学期を助走期間として意識

3年生0学期は生徒と教師の助走期間 ●教師の日々の声掛けは、生徒を変える最も有効な指導であるが、生徒に浸透し、行動となって現れるのは2、3か月後というのが現実だ。また、入試を直前にして多くの教師が「この生徒はあと3か月あればもっと伸びただろう」と時間不足を嘆いた経験があるはずだ。**図1**で3年生0学期の指導がその後の取り組みにどう結びつくのかを学年団で目線合わせし、3年生4月には受験生へと転換させ、入試本番に学力のピークをもって来るようにしたい。3年生0学期は変わる時期ではなく、生徒にとっても、教師にとっても変わるための助走時期なのだ。

入試は授業の延長線上にあることを理解させる ●この時期はまだ「入試」を自分の問題として捉えるのは難しい。センター試験を活用し、2年生までの履修内容が出題内容の過半数を占めることに気付かせ、今の授業が入試につながっていることを伝えたい。

データ活用
の流れ

指導の目線合わせで結束力の強い学年団へ

どんな受験生を育てるのか目線を合わせる ●2年生2学期の後半の学年会で**図1**を利用して、3年生6月までの進路行事の意味や指導内容を確認、共有する。ここでのキーワードは「授業を大切にする受験生の育成」である。取り組みの軸になるのがセンター試験だ。0学期のスタートとして入試1年前に、校内で受験・自己採点の体験をさせる。その後、面談を通して学習計画の立案と検証を重ね、校内外の模試で実践力を測る。入試をプレ体験させ、それを踏まえて授業本位の学習習慣へとつなげていく。

指導の関連性を強く意識する ●センター試験で意識を高めた生徒を指導するには、最新の入試の知識が不可欠。だからこそ、12月に教師も入試研究を始めたい。また、センター試験後の学習計画の成果を検証する場を学年としてどのテストと位置付けるかや、テスト後に面談の機会を確保するなど、指導の連続性の確認が重要だ。

0学期の意味を 3年生4月以降と 結びつけて 理解する

2年生12月までの学年会で**図1**のような資料を基に指導の流れ、関連性を共有

センター試験のプレ受験体験、その後の校内模試や面談などで、「授業中心で受験を戦える」ことを繰り返し説明する

生徒の意識変化と学習状況の改善をチェックする

0学期の取り組みを3年生4月以降の指導へとつなげ、真の受験生としてのスタートを4月に切らせる

プラス α の指導

志望校は「決定」ではなく「設定」

2年生の段階で志望校を「決定」している生徒はまだ少ない。また、決定するだけの根拠や展望がないことも多く、狭い視野や思い込みで性急に決定させることも避けたい。よって、3年生0学期の志望は「決定」ではなく、担任のアドバイスも踏まえた「設定」であることを強調したい。決定する必要はないが、設定することで目標に向けた具体的な努力が始められる。特に、難関大志望者は、この段階からの対策があとになって大きな力となっていく。

受験のためだけではない学習の重要性を伝える

5教科の自分の成績を目の当たりにして、受験勉強に負担を感じ、安易にアラカルト方式の受験に走ったり、3教科型に絞り込もうとする生徒が現れやすい時期でもある。そうした生徒が出てくる前に、LHRなどで「受験勉強は合格だけがゴールではない。5教科を粘り強く学び、幅広い教養を身に付けることが、社会人基礎力につながる」ことを伝えていきたい。その際、企業の就職試験などで用いられるSPI試験の内容を見せてみるのも効果的だ。

入試本番に学力のピークをもってくることを意識させる

自校の現役生の入試本番までの伸びを属性別にパターン化し、学力曲線として提示している学校もある。そのような学校の生徒は、「部活動を引退して、この時期から成績が大きく伸びるはずだ」と、イメージを持っているだろう。3年生0学期を生かすことで学力曲線は3か月分前に平行移動し、入試本番でのピーク値もその分上昇する。スタートを早めに切ることで学力曲線も変化することを理解させ、受験生への切り換えの重要性を更に強調していきたい。

活用後のフォロー

◎図2は今後も模試の個人成績票の返却があるタイミングで繰り返し使用していくことにより、生徒自身が自分の成長を把握する記録となっていく。図3は新3学年団と歩調を合わせ、生徒に適した内容になっているかを随時確認しながら、少なくとも3年生4月くらいまでは使用したい。3年生になったからといって目新しい学習法や教材に飛びつくのではなく、これまでと同じように、授業を中心とした学習の継続が重要であることを生徒に実感させるツールとなる。3年生0学期の取り組みが成功すれば、3年生からの特別な変化は無用となる。授業中心の自律的な学習スタイルが、3年生4月に完成していれば、受験生として最良のスタートだ。

データ活用
のねらい

ギャップは「授業で埋められる」と指導

目標とのギャップから、生徒を「やる気」にする●図2は生徒に自身の目標と現状をプロットさせたレーダーチャートと、生徒に前を向かせる面談指導の流れである。まずは、現状と目標とのギャップを把握させ、自身の弱点と目標を明確化することが重要だ。

「何が足りないのか」を意識した自宅学習計画・記録表●図2で生徒に現状と目標のギャップを感じさせたところで、図3では具体的に行動レベルにまで落とし込めるように指導する。「自分には何が足りていないのか」「どんな学習が必要なのか」を考え、「すべきこと」を具体化し、日々の学習への取り組みを自分でチェックさせる。0学期に教師が手を掛けることで、3年次には、自分で弱点を意識し、それを埋める具体的なアクションのとれる生徒が育つ。現状と目標との学力ギャップを埋めていくのが受験勉強であり、その中心に授業の徹底活用があるのだという前向きな姿勢にしていくことが狙いだ。

データ活用
の流れ

目標の自分とのギャップを埋める

教科の弱点をビジュアル的に把握させる●模試の返却時に、登録した志望校が現時点での自分の志望校として相違がないかを確認してから、目標の自分と現在の自分との教科別学力ギャップを把握させる。その後、設問別正答率などを見て、自分には今後どんな学習が必要かを具体的に考えていく。その過程で、担任は面談などを実施し、「そのギャップは授業で十分埋められる」ことを個別に訴えていく。

弱点補強計画を自分で描かせる●目標と現状のギャップを埋める学習を、図3を使って具体化する。目標を書かせ、その達成のためには、どの教科をどれくらい学習する必要があるのかを考えさせ、時には教師がサポートに入りながら記述させる。学習計画表が完成したら、その後は適宜、面談などで学習状況を検証する。ギャップを埋めるためにどうするか、生徒が自分で考え、言語化し、実際に実行できるようにすることが、3年生0学期に求められる生徒の成長なのだ。

差とその克服の道のりを把握し自分の言葉で語らせる

2年生12月の面談や、1月のセンター試験への挑戦を通して、現時点の志望を明らかにする

模試の個人成績票などを活用して図2を作成。目標とのギャップを把握し、その克服のための学習法を考えさせる

生徒の分析とそこから立案した計画(図3)が妥当かを面談でチェックする

教科担任とも連携し、生徒の学習への取り組みを把握。意欲が低下しないようにフォローする

風に強い建築物を造り 安全・快適な住環境の創造を目指す

東京工芸大大学院 工学研究科 田村幸雄研究室

世界の自然災害による被害の大半は、強風、及びそれに起因する水害によって引き起こされる。世界屈指の台風大国であり、都市には高層ビルが、住宅地では木造家屋が密集する日本において、強風災害への対策は特に重要な問題だ。東京工芸大の田村幸雄教授は、「風工学」の第一人者として強風に耐える建築物の設計を手掛けると共に、国連機関やNGOなどと連携して、アジアにおける強風災害の低減にも取り組んでいる。

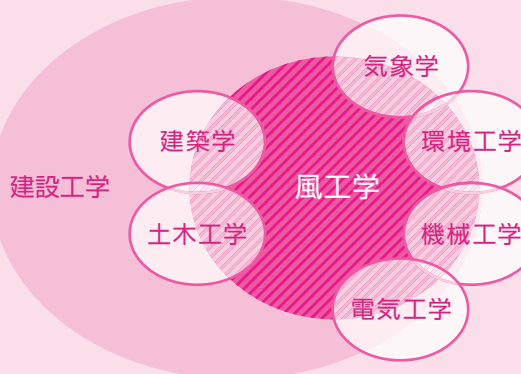
フローチャートで分かる田村研究室

大学院生の 主な出身分野

工学（建築・土木）

◎大学院生の出身分野は建築・土木工学が多く、そのほかには航空工学や電子工学の出身者もいる。博士課程はほとんどが外国人で、短期の研究員も合わせると、韓国、中国、台湾、フィリピン、マレーシア、バングラデシュ、ベトナム、インド、オーストラリア、イタリア、アメリカなど十数か国から集まっている。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎風工学は、風に強い建物の設計や強風災害の低減などについて研究する「耐風分野」、通風・換気など風資源の有効利用や大気汚染対策などについて考える「環境分野」に分かれる。建築・土木工学を土台とするが、自然現象と各種構造物、及び人間が対象であるため、気象分野や機械分野、社会工学分野などとの共同研究も多い。政策提言や防災活動にもかかわるため、行政庁や国際機関、NGOとの連携も欠かせない。

研究成果と 社会のかかわり

風災害の防止

風資源の活用

環境保全

住宅・都市計画

政策への提言

など

◎風に強い建築物の設計、台風やハリケーンなどによる風災害の低減、自然エネルギーの活用による省資源化、大気汚染の改善、研究内容の法令やガイドラインへの反映など多岐にわたる。

必要なのは人間、環境、資源への「愛情」

風工学分野が求める学生像

人間・環境・資源への愛情

未知の分野へのチャレンジ精神

クリエイティブなことへの興味・関心

良い論文を書いて有名になりたい、一流企業に入りたい。若い頃はそうした野望があって当然ですし、それがモチベーションとなるのは悪いことではありません。しかし、風工学の研究のモチベーションは、何よりも「愛情」であってほしいと思います。

台風やハリケーンの被災地に行き、被害者の遺族に接すると、災害の恐ろしさや悲惨さ、何よりも人の命の尊さを思わずにはいられません。たとえ命が助かっても、体に障がいを負い生きていく人も大勢います。我々の技術で一人でも多くの人を助けたい、尊い人命を救いたい。そうした愛情こそが高い目標に向かって努力し続ける大きな力になるのです。自身の名声だけを追っているようでは長続きしませんし、本物の研究成果を上げることは出来ません。

また、風工学は未成熟な学問分野です。「この分野は自分が切り開く!」というチャレンジ精神に溢れた人、クリエイティブなことに興味がある人にも目指してほしいと思います。何より人類・地球への愛を持った方が一人でも多く風工学の分野に進むことを望んでいます。

高校生へのメッセージ 自分のしたいことに好きなように取り組める時期は、人生の中でそう多くありません。今は、自分が一番興味のあることに打ち込んでみてください。一方で、学校の学習にしっかり取り組むことも重要です。基礎学力の獲得に向けて地道に努力した経験は、自分の人生の筋道を立てる時に大きな糧となるからです。



田村幸雄 教授 Tamura Yukio

東京工芸大工学部教授。東京工芸大グローバルCOEプログラム拠点リーダー。早稲田大学院理工学研究科建築工学専攻修了。㈱MUSA研究所で建築構造設計に従事した後、東京工芸大に着任、現職。アメリカ、ノートルダム大学、中国・同済大学、ポーランド・オポーレ工科大学などで客員教授を務める。国際風工学学会会長。日本建築学会賞、日本風工学学会賞、米国土木学会の Jack E. Cernak Medal など、受賞歴多数。

研究概要

風に強い建築物の設計、居住性の向上などを追究

建築物の安全という「耐震性」を思い浮かべる人がほとんどでしょう。しかし、日本も含めて世界の自然災害の大半は、台風や竜巻などの強風、それに伴う水害によるもので、死者数や経済的損失は地震より多いのです。

私の研究分野は風工学の中でも「耐風工学」といい、風に強い建築物の設計、強風による揺れの抑制、揺れが人間に与える影響などを研究しています。風に対する検討が重要になる建物は、高さ200メートル以上の超高層建築、スタジアムや体育館、工場など空間の大きな建築物、ドーム球場のような軽い建物などです。これらの建物は、地震による力よりも風による力の方が重要になるのです。

風に強い建物を造るには、固く重くしなければなりません。逆に、耐震性を高めようとするなら、軽く柔らかい構造にする必要があります。日本は地震・台風ともにそのレベル

は世界トップクラスですが、解決策は正反対です。ここに日本の建築の難しさがあります。

また、強度は十分でも、高い建物の場合は風による揺れに悩まされる場合があります。高層建築によって発生するビル風の問題もあります。風工学の見地から解決しなければならぬ問題はたくさんあるのです。

研究の広がり

風災害対策のため 国連機関や NGO と連携

研究では、仮説を立て、実験・解析を行い、論文に仕上げるまで数年かかることもあります。それが法令やガイドラインとして採用され、その技術によって建物が造られるのは、更に10〜20年も先のことになります。そこで私たちは、建築物や都市計画などに、研究成果を直接的に反映する活動にも力を入れています。一つは、風災害低減のための防災活動です。2008年、約14万人もの死者・行方不明者を出したミャンマーのサイクロンを見ても分かる通り、強風による災害は必ず大規模な水害を伴い、それらが複合して被害を拡

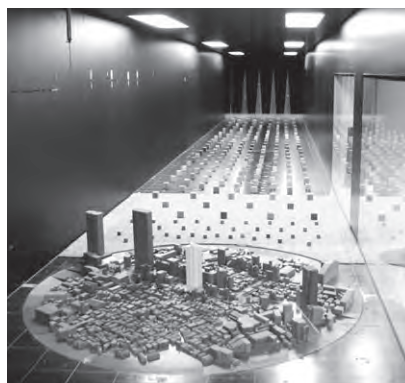


写真 研究室にある風洞実験装置。7つの風洞があり、風工学の研究環境としては世界屈指だ

大きさせます。しかも、そうした被災者の大半は貧困層です。災害で家や家畜を失った人々は更に貧困になり、再び災害に見舞われた時、被害はより甚大となります。この負の連鎖を断ち切り、災害から一人でも多くの人を救えるよう、アジア各国の政府へ政策提言を行い、現地で人道支援や防災活動に取り組む国連機関やNGOを技術支援しています。

また、大型建築のプロジェクトに加わり、設計会社や施工会社に耐風技術の供与もしています。例えば、東京都墨田区に建設中の東京スカイツリーのプロジェクトに、耐風設計のアドバイザーとして参加し、実験手法やデータ解析の指導などを行ってきました。

東京スカイツリーほどの高さになると、地震よりも圧倒的に風への対策が重要になります。東京タワーの2倍近い高さの鉄塔が誕生するわけですから、我々研究者にとっても未知のことばかりです。上空の風の特性など分かっていることは山ほどあります。事前に現地の風を観測し、10種類以上の風洞実験を行い、世界中からさまざまなデータを採集するなど、出来る限りの努力をしています。すべてがチャレンジですが、だからこそやりがいも大きいのです。

研究を志したきっかけ

「適性」は努力の積み重ねから生まれる

私と風工学との出会いは偶然でした。高校時代は数学と美術が好きで、両方の特技を生かす分野はないかと考え建築学に進みました。修士課程時代に耐震について研究していたところ、研究室でたまたま風圧の測定をする事になりました。私がその担当となり、高層建築といえは霞が関ビルくらいで、建築にとつて耐風工学はそれほど重要な研究分野とは思われていませんでした。当

時、在籍していた大学に風工学の専門家はおらず、実験設備もない。私は世界中から論文を集めてひたすら読み、理論的研究に没頭しました。

今思えば、この経験は大変貴重でした。設備が整った大学であれば分からないことは実験をすればすぐに答えが出るため、理論的考察に多くの時間を費やす必要がありません。私は逆に、誰も教えてくれない、研究資金もほとんどないからこそ、ひたすら他人の論文を厳密に読み、理論的な研究に集中したことで、研究者としての力が身に付いたように思います。若い時、不自由な環境を強いられた方が、かえって自分の力を高めるのに役立つのかも知れません。

若い人には、いつか自分に合ったものが見つかった時に精一杯頑張ろうと考えている人もいるようです。しかし、そのような受け身の姿勢では「自分に合ったもの」に巡り合うことはありません。「適性」は、その時々自分に与えられた課題に全力で取り組み、一つの間にか自分の中に身に付くものなのです。今、自分がすべきことに全力を傾けることが、将来を切り開く力になるのです。

用語解説

① ミャンマーのサイクロン

サイクロンはインド洋で発生する発達した熱帯低気圧。2008年にベンガル湾で発生したサイクロン「ナルギス」は、大雨や洪水、暴風により、ミャンマー観測史上最悪の自然災害となった。

② 東京スカイツリー

東京都墨田区に建設中の電波塔（2011年12月竣工予定）。高さ634メートルで、完成すれば自立式電波塔としては世界一の高さになる。五重塔の心柱制振など古来の技を最新技術で再現している。

③ 風洞実験

人工的にさまざまな種類の風を発生させる風洞を用いた実験。装置の中に、調査対象となる建設予定の建物や周辺都市、地形を再現した縮尺模型を置き、風の流れを観測する。

④ 霞が関ビル

1968年、東京都千代田区霞が関に建てられた超高層ビル（地上高147メートル、36階）。

円筒形の構築物への風の影響を研究



玉田 寛さん
Tamada Hiroshi

東京工芸大大学院工学研究科建築学専攻
博士前期課程2年
(長野県岡谷南高校卒業)

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 学部時代は神奈川大工学部で建築学を専攻しました。高校時代からモノ作りが好きで、どうせ作るなら出来るだけ大きなものを、と考えたからです。小学生の時にニュースで見た阪神・淡路大震災の惨状が記憶にあり、大きな地震でも崩れない建物を造りたいという思いもありました。

しかし、大学で振動学を学ぶうちに、地震の揺れよりも風に興味を持

つようになりました。地震は土地ごとの特徴によって揺れ方が変わりますが、風はある程度の規則性があるため、対策にも汎用性があるのではないかと思ったからです。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 煙突のように外装と構造躯体が一体化した「モノコック構造」の構築物を造る際の風の影響について研究しています。

建築物は外装材、構造躯体とも、それぞれ作り方や強度など基準となる法律やガイドラインがあります。しかし、モノコック構造では外装が強度部材となる構造を兼ねているため、どちらの基準に準拠すればよいのか曖昧です。この風に対しては、外装を強くした方がよい、構造を工夫した方がよいなど、耐風性を高めるために外装、構造のどちらに比重を置いたらよいのかを解き明かすことが研究の目的です。比較のために、高さや太さが異なる円筒形の模型を二つ作って風洞実験を行い、風圧などを測定してデータの収集・分析を行っています。

実験では、その過程で何度もデー

タを取りながら進めるので、一からやり直しになることはほとんどありませんが、それでも思うような結果が得られないことがあります。センサーはきちんと作動しているか、データの解析方法に間違いはなかったか、後戻りして調べるのは骨が折れる作業です。

それだけに、イメージ通りにデータが取れた時は何よりもうれいです。苦労があるからこそ、成功した時の喜びもひとしおなのです。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 「将来、これがしたい」というものを明確に持っているのなら、それに全力を傾けてください。もし、まだないのなら、将来ど

のような分野に進んでも対応できるように、高校時代は出来るだけ視野を広げておくことをお勧めします。

私自身、大学4年生から本格的に風工学の研究を始めました。建築学ではあまり学ばない流体力学や気象学、確率論などの知識も必要になり、自力で学ぶ必要がありました。また、田村教授の研究室の研究生はほとんどが外国人です。もっと上手に英語を話すことが出来れば、世界は更に広がるだろうと思います。さまざまな分野の人たちと共同研究を行うには、コミュニケーション力も必要になります。

高校時代は自分自身の幅を広げる貴重な時間です。その時々で出来ることに全力でぶつかってください。

私の高校時代

「強歩大会」で身に付けた忍耐力

●高校時代の一番の思い出は、年1回の「強歩大会」。諏訪湖畔から山梨県との県境まで、男子生徒は約45キロメートルを8時間以内で走破する母校の伝統行事です。1年生の時はタイムリミットぎりぎりでしたが、学年が上がるごとに1時間、2時間とゴールまでのタイムが縮まっていたことも、自分の成長を実感する良い機会になりました。この経験は、肉体的・精神的に耐える力を付けてくれたと思います。研究では、限られた時間で実験を行わなければなりません。特に、データにらめっこしている時間は忍耐の勝負。強歩大会で培った力が、今に生きていることを感じます。

大切なのは、勇気を持って一歩を力強く踏み出すこと。実験も大変だからといって躊躇していたのでは前に進みません。一歩一歩、確実に歩んでいくことが、自分自身の成長にもつながるのです。

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



「先生の授業はハズレ」と評価され 思考力と得点力が結びつく授業を模索

鹿児島県立鹿屋高校

立神倫史先生

37歳

私が乗り越えてきたもの

進学校で打ち砕かれた自信

歴史の謎に真正面からぶつかる魅力を伝え、その答えを自分で見つける力を育てたい。そんな気持ちを抱いて教師になりました。初任校は生徒の進路が多様に分かれていたこともあり、博物館から借りた土器を教室に持ち込んで観察させるなど、とにかく日本史に興味を向けようと努めました。中には、「先生のおかげで日本史が好きになった」と言う生徒もあり、指導には自信を持っていました。

しかし、次に赴任した鹿屋高校では、限られた時数での受験指導が求められ、私の授業スタイルは通用しませ

でした。生徒の興味・関心を引くことが中心の授業では、教科書の進行は遅れるばかり。そのため、模試などの平均点が低迷し、赴任後2年間で、生徒や保護者の間に、「立神先生の授業はハズレだ」という評判が広まりました。

マンガに負けた私の授業

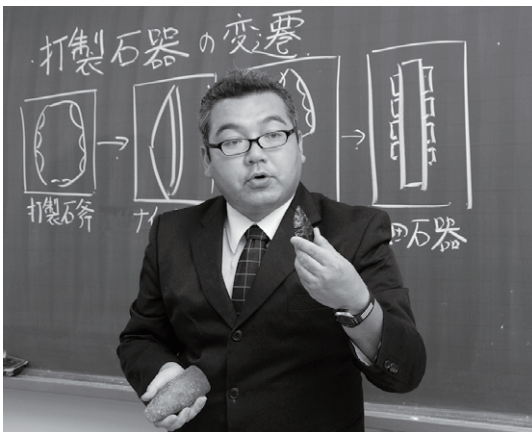
当時、日本史が苦手な学習意欲も上がらない理系の生徒がいました。私は授業中の声掛けなどで意欲を高めようとしたものの、手応えは感じられず、3年の秋頃にはすっかり諦めていました。ところが、その生徒はセンター試

験でそこそこの点数を取ったのです。数学の教師に勧められて読んだ歴史マンガが役立ったということでした。

私は、自身の指導力のなさと、教師として生徒の学力伸長を諦めたことへの恥ずかしさを痛感しました。「全員が入試で確実に得点できる授業をしよう」。そう決意し、過去の模試やセンター試験を分析して出題傾向を把握し、暗記やスキルを重視した授業に切り替えました。その結果、確かに平均点は上がったのです。「自分のやりた授業ではない」というジレンマはあったものの、ある種の達成感は抱いていました。

ところが近年、私が受け持つ生徒の平均点は、ふたたび低迷し始めました。

生徒の力を伸ばすことを諦めてしまった自分



たてがみ・みちふみ ◎教職歴12年。同校に赴任して5年目。担当教科は日本史。2学年担任。
鹿児島県立鹿屋高校 ◎全日制／普通科／共学。
10年度入試では、国公立大は、鹿児島大、熊本大、宮崎大、九州大、大阪大などに合格し、医学部医学科や歯学部にも合格。私立大は、早稲田大、法政大、明治大、立命館大などに合格。

そして、これからも挑み続ける目標

いかに問題文を読み込ませるか

平均点の低下に目を疑った私は、ゼンター試験を受けた全生徒の問題用紙を集め、思考過程を生徒のメモから分析しました。見えてきたのは、2013年度全面実施の新課程に合わせて思考力や分析力を要する問題が増え、多くの生徒がそれに対応できていない状況です。文章を読んで正誤を判定する問題や、前後の時代との関連を問う問題を間違える生徒が目立ちました。

原因は明らかでした。私が「必ず得点力が付く」と豪語して行っていたのは、出題頻度の高い箇所を暗記するよう指導する授業だったからです。暗記

による寄せ集めの知識では、歴史をストーリーとして捉えられず、歴史の流れから問題文を批判的に読むことも、時代のつながりを意識することも、出来なくて当然です。また、そんな一方的に与えるだけの授業では、生徒が考える力を付けられるはずもありません。自分で弱点を見つける主体的学習に発展しないため、授業で扱わなかった内容は、大半の生徒が不正解でした。

思考力を育む授業をしたい

自分の指導を根底から改める必要を感じた私は、まず、教科書を熟読することで、歴史事項をストーリーの中で位置付けさせようと考えました。

教科書はあらかじめ家庭で読んでく

るよう指示し、授業では重要な段落だけを選び、キーワードにアンダーラインを引かせながら、声に出して読ませます。空いた時間は、人物同士の関係や事件・出来事の相互の影響を理解できるよう、教科書に載っていない背景知識の解説に充てています。毎回授業の冒頭で、私がその日の内容に関連する寸劇を演じるなど、ストーリーの印象を強める工夫もしています。家庭学習でも、やみくもに用語を覚えるのではなく、常にストーリーを意識して教科書を読み返すよう指導しています。

更に、弱点を自覚させるため、模試や定期テストの後、間違えた問題を自分なりにまとめて提出させる指導も始

教師人生を通して挑む指導テーマとの出会い

めました。最初は私がポイントを整理したプリントを参考にしていました。が、赴任5年目の2010年度は、自主的に教科書などを調べてまとめる生徒が増えており、考える習慣が定着してきていると感じます。

教師が歴史の謎を問い掛け、生徒自身が考えるところという私の理想の授業は、思考力を育む工夫の中で、少しずつですが、実現しつつあります。「もっと歴史を勉強したい」と、考古学専攻に進学した生徒が現れたことも、自分の指導を後押ししてくれました。

考えることの大切さを伝えながら、それを生徒の進路実現に結び付けていく指導の確立に、今後の教師人生を通して挑み続けたいと思います。

立神先生 の 授業実践

Q&A



Q 思考力を付けるために、模試や定期テストの結果をどのように活用していますか？

A 振り返りノートを用意させて、問題用紙から間違った設問や解説を切り取って貼らせます。その際に十分なスペースを確保しておき、そこに正解と共に、関連する内容を生徒たちなりにまとめさせます。例えば、正解が「白鳳文化」という問題に対し、「飛鳥文化」と誤答した場合は、二つの文化の特徴をまとめて比較します。知識の補強だけでなく、「自分は何が分かっていないのか」を自覚し、自分自身で弱点を理解して学習に向かっていく姿勢の育成を期待できます。

Q 歴史をストーリーとして捉えさせるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 「本能寺の変で討たれる6時間前の信長」「大坂夏の陣で真田幸村に本陣を急襲された時の家康」など、生徒が興味を持ちそうなテーマを選び、寸劇を行っています。気を付けているのは、単に面白おかしく創作するのではなく、「この文献に基づいて再現している」など、明確な根拠を示すこと。これにより、寸劇の内容と学習内容がつながり、歴史がストーリーとして認識されます。教科書に沿った授業はどうしても淡々と進行しますが、寸劇を始めてから授業にメリハリが出て、生徒の集中力が高まっているように感じます。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す立神倫史先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、立神先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

教科の中での言語活動で 考える力と表現力を養う

— 広島県立忠海高校の実践から —

新課程では、小・中・高のすべての学校段階で「言語活動の充実」が盛り込まれ、全教科・領域等で展開するようたわわれている。高校では、現行課程でも「総合的な学習の時間」や小論文指導等で、「読む」「書く」「話す」「聞く」を行う活動は実践されているが、教科指導ではどのような言語活動が考えられるのか。実践事例から探る。

PISA調査で日本の高校生の「読解力」低下が課題に

新課程で「言語活動の充実」が打ち出された背景は二つある。一つは、2004年に文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」の中で、教育活動全体での「国語力」の重要性がうたわれたこと。もう一つはPISA（OECD生徒の学習到達度調査）の調査結果により、「読解力」に課題があると示されたこと（図1）である。新課程では、思考力、判断力、表現力を育成し、課題解決力を身に付けることを目標として「言語活動の充実」を掲げ、小・中・高すべての段階でその重要性を明示した。13年度に全面実施される高校の新課程でもその内容が盛り込まれている。

全教科・領域で「言語活動の充実」を展開

「言語活動」は、「話す」「聞く」などの「言葉による活動」と捉えられる。新課程では「言語活動の充実」を全教科・領域等で展開す

るよう明記された。例えば、数学では「自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり、議論したりすること。」、理科では「各科目の指導に当たっては、観察、実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出し、それらを表現するなどの学習活動を充実すること。」とその重要性が明示されている（*）。

このような活動を従来から実践してきた教師は少なくないが、新課程を機に改めて「言語活動」の内容を振り返り、より効果的な活動にしたい。今号では、各教科で言語活動を取り入れ、思考力、表現力を育成している広島県立忠海高校の実践例を紹介する。

図1 PISA調査における日本の結果
2000年調査と2006年調査(読解力)の比較

	2006年	2000年
日本の得点	498点	522点
OECD平均	492点	500点
OECD加盟国中の順位	12位	8位
全参加国中の順位	15位	8位

出典／「OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2006年調査国際結果の要約」より抜粋

*文部科学省「言語活動に関する学習指導要領改訂の記述例【高等学校】(抜粋)」より

広島県立忠海高校

「ことばの教育」に 全教科で取り組み 考える力と表現力を育てる

「なぜ」という問い掛けから
相手に伝える力を養う

広島県立忠海高校が学校教育全体で言語活動を取り入れたのは、2005年度から3年間、広島県教育委員会「ことばの教育」の研究校に指定されたのがきっかけだ。同校のある竹原市忠海地域の小・中学校と連携し、「各教科における、ことばの力を土台とした指導方法の工夫・改善」教科目標達成のための有効な『言語技術』の活用をもとに「を主題として、言語技術を教科学力の向上に生かす方法を研究してきた。

07年度に研究指定は終えたが、現在も研究の成果を基に、「総合的な学習の時間」や小論文指導、教科学習と、学校教育全体で言語活動を取り入れている。進路指導部主任の石村まさみ先生は、その狙いを次のように話す。

「本校は1学年2クラスと規模が小さく、生徒と教師の距離が非常に近いのが特色です。生徒が教師の指導によく応えてくれる半面、両者がなれ合ったり、多くを語らなくても意思疎通が出来たりという面もあります。この地域の小・中学校も同じような環境であり、そのため、自分で考える力や

他者に伝える力が十分に育つているとは言えませんでした。生徒の多くは高校を卒業したらこの地を離れます。社会で生き抜くために、自分でしっかりと考え、自分の言葉で伝えられる力を付けさせたい。研究校に指定されて以来、この思いは継承されています」

同校は、日常会話から生徒に筋道を追って話をさせる指導を徹底している。例えば、生徒が職員室に来たら、名前と誰にどのような用事があるのかをはっきり言わせる。「先生、鍵」とだけ言う生徒には「どこの鍵を何のためにどうしたいの」と問い返すのだと、教務部主任の有木克明先生は話す。

「授業でも職員室でも、生徒との会話では意識して『いつ、どうして、なぜ』と問い掛けるようにしています。生徒は初め、どうしてそう問われているのか分からないようですが、教師が辛抱強く繰り返すことによって、他人に伝わるように話すにはどうすればよいのかを考えるようになります。1年生の時には単語の羅列でしか返答できないような生徒でも、2年



広島県立忠海高校
有木克明 Ariki Katsuki
教職歴13年。同校に赴任して5年目。教務部主任。担当教科は理科。



広島県立忠海高校
石村まさみ Ishimura Masami
教職歴9年。同校に赴任して6年目。進路指導部主任。担当教科は英語。



広島県立忠海高校
兼田修一 Kaneda Shuichi
教職歴19年。同校に赴任して9年目。総務企画部。担当教科は理科。



広島県立忠海高校
西岡隆史 Nishio Takashi
教職歴7年。同校に赴任して3年目。教務部。担当教科は数学。

広島県立忠海高校
旧制中学を前身とする、110年以上の歴史を持つ伝統校。瀬戸内海に面した自然環境に恵まれた地にある。
全日制／普通科／共学／1学年約80人
2010年度の合格実績◎国公立大は、広島大、山口大、愛媛大などに11人が合格。私立大は、関西大、近畿大、広島女学院大などに延べ62人が合格。

生になる頃には文章で話せるようになっていくのです」

定期考査には 全教科で論述問題を出す

学校全体で取り組む教科の中で

図2 定期考査での記述・論述問題の例

数学I

$\sqrt{8+2\sqrt{15}}$ の2重根号をはずせ。ただし、2重根号をはずせる理由も述べる。その際に $a^2+2ab+b^2=(a+b)^2$ を利用すること。

化学I

A君が一人暮らしをすることになりました。新しい家のガスコンロを買うのに、都市ガス（主成分メタン）用を買えばいいのか、プロパンC₃H₈ガス用を買えばいいのか、迷っています。あなたの方で、どちらを買えばいいのか、化学的理由付けをして教えてあげてください。

英語I

（英語の課題文を示した上で）伝来した当時のスシは、どのようなものでしたか。本文に即して45字以内の日本語で答えなさい。

英語II

（英語の課題文を示した上で）下線部①の that が示す内容を本文に即し35字以内の日本語で答えなさい。

家庭基礎

「たんぱく質の補足効果」について説明しなさい。

保健体育（1年生）

「受動喫煙」について、何が問題なのかも含めて説明しなさい。

保健体育（2年生）

「中高年期に、はりのある生活をおくるために」というテーマで、次の3つのキーワードを入れて文章をつくりなさい。

キーワード：①役割 ②生きがい ③存在感

*学校資料を基に編集部で作成

の言語活動の一つとして、定期考査に全教科で論述問題を必ず1題以上出すことが挙げられる（図2）。保健体育や家庭科など、論述問題を取り入れるのが難しい教科では、用語説明などを出題する。理科担当の兼田修一先生は、それでも効果はあると話す。

「知識の定着を問うのであれば選択式という方法もあります。しかし、記述式であれば、たとえ暗記したことでも、自分が得た知識を言葉にして説明するわけですから、より深い理解が必要となり、

学習の定着が促進されるのです」定期考査後は、教科ごとに正答率、解答率、無回答率を算出して分析する。着目するのは無回答率だ。白紙での提出は、考えることを諦めたことになる。最後まで考えさせるにはどうすればいいのかを検討し、授業の改善に生かす。また、論述式に慣れていない1年生は特に空欄になりやすい。最初は数か所を虫食いにした文章の穴埋め問題を出すなどして、徐々に論述問題に慣れ、自分の言葉で書けるようになる工夫をする。

授業で行う言語活動の工夫と具体例

■身近な話題を取り入れ、自分の知識と結び付けて考えさせる

授業に言語活動をどう取り入れるかは、個々の教師に任されている。理科担当の有木先生は、授業に身近な話題を取り入れ、生徒の関心を引きつけると共に、生徒の持つ知識と結び付けて考えられるよう工夫する。そして、それらの話から定期考査の論述問題を出す。

「前任校でも生徒に身近な素材を取り入れて話そうとしていましたが、本校に赴任してからは、それが『ことばの教育』であると意識するようになりました。身近な話題を授業に盛り込むことは、生徒の関心を引く効果があるだけでなく、生徒が自ら考えるきっかけになると再認識したのです」

■他人に説明することを目標に言語化させる

数学では、09年度に西岡隆史先生が「ことばの教育」をテーマに研究授業を行った。まず生徒に定積分で関数のグラフで表される図

形の面積を求める問題の解説を配布し、「この問題を他人に解説できるように分析してレポートにまとめよう」と宿題を出す。宿題は2日後の授業に持参させ、グループ内で発表し、どの解説が分かりやすいかを話し合う。その後、グループの代表が全体発表し、クラス全体で検討した。

「『他人に説明する』ことを目標に、まずは1人で考え、それをグループで発表し、質問に答えるという言語活動を設定しました。私が良い解答として皆の前で発表したのは、配布した問題では曖昧にされていた点に疑問を持ち、自分なりに解説を加えた生徒のものでした。問題文をきちんと読み取り、課題意識を持って取り組みたいレポートを評価したのです。結果的に、必ずしも数学の成績が良い生徒が良いレポートを書くのではなく、じっくり考えることが出来る生徒が良いレポートを書いています。こうした生徒が大学での学びや社会で力を発揮しているのだと思います」（西岡先生）

■発表を意識させ、実践力につな

図3 英語の授業における言語活動の例

学年	内容	目的
1年生	“Japan to the World” Project 日本について外国の人に紹介するプレゼンテーション活動	自分が調べたことに対して、自分の考え・意見を書き、話すことができるようになる。また、話されたものを聞き取ることができる力を身に付ける
2年生	世界遺産ツアー 世界遺産について調べてそのツアーを企画し、プレゼンテーションする活動	自分が調べたことに対して、自分の考え・意見を書き、話すことができるようになる。また、話されたものを聞き取れるようになる。論理展開に注意し、意見などを効果的に伝える表現を使うことができる（聞き手を意識させる）
	英作文コンテスト 与えられたトピックについて自分の意見を書く。事前に論理的な文章の書き方などを指導する。優秀な作品は県の英作文コンテストに出品する	自分の考えを適切に伝えることが出来る。考えの論拠・理由を示すことができるようになる
3年生	予想問題作成 定期考査の問題をグループで話し合い、検討して作成する	問題解決の過程の中で、他者と協同して課題を解決することができる

*学校資料を基に編集部で作成

がる指導を行う

英語では、元々行ってきた実践的な英語を身に付けるための活動を「言語活動」の観点で捉え直したことで、活動の目的が一層明確になった(図3)。生徒に対して、発表をより意識させて指導するようになったと石村先生は語る。

「生徒に『発表』という場を何度も与えることは、学習の定着という効果だけでなく、生徒が主体的に活動に取り組むようになるという成果も生まれました。恥ずかしい

「なぜ」という問い掛けも言語活動の一つ

「ものは出せないと内容を吟味しますし、発表に向けて発音練習もします。目標に向けて計画を立て、実践し、次の活動ではその反省を踏まえて取り組めるようになります。また、発表が評価されたという達成感も次の学習の糧となる重要な要素です」

各教科で行われている言語活動の共通点は、これまでの指導を見直し、言語

活動として再構築していることだ。新たな活動を取り入れるのではなく、授業中に要所で問い掛けや発表を行い、生徒に考えさせ、表現させることを一層重視している。

「理科での言語活動には実験のレポートが挙

言語力はすべての力の土台

「二つの目標に向けてグループで協力し、調べ、話し合い、発表のために文章にまとめる。まさに、自分で考え、相手に伝えるように表現するという過程を体験できます。同じ言語活動でも、小論文の作成は家庭で1人でも出来ますが、グループ学習は学校でしか出来ません。生徒の力の伸長のためには、普段の授業を少しずつ削って時間を捻出してでも取り組む価値があると思います」(有木先生)

進度の都合を考えると、すべて

の授業で言語活動を実践するのは難しい。しかし、今後出来る範囲で続けたいと有木先生は話す。

「中学校の先生に、本校に通う卒業生が中学時代と比べて積極的に話すようになって驚いたと言われたことがあります。自分の意見を書いたり発表したりすることで、2年生になればしっかりと話が出来ようになります。進学面でも実績は伸びています。それは、一般的に言葉の力が求められるといわれている推薦入試やAO入試での実績だけではありません。一般入試でも言語活動を充実してきた成果が表れてきました。言語力はすべての力の土台になります。研究授業などを通して言語活動の意義を伝え、授業に無理なく取り入れられる方法を模索したいと思います」

更に石村先生は、新課程を指導を見直す機会にしたいと言う。

「新課程では、言語活動の充実が一層求められています。これを機に、生徒に本当に必要な指導は何かを精査し、取り組みを再定義したいと考えています」

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

学びと社会との接点を意識させ 学習意欲を高める大学・学部

雇用情勢の悪化や就職先とのミスマッチといった課題から、多くの大学がキャリア教育に力を入れている。今回注目したいのは、正課の大学教育を通じて自分の学びと社会との接点を感じさせる取り組みだ。目の前の就職だけでなく、広く社会を意識することで、学生にはどのような変化が表れるのだろうか。

正課に組み込み学生 のキャリア意識を高める

文部科学省及び厚生労働省の調査によると、2010年3月に大学を卒業した学生の就職率は、前年度を3・9ポイント下回る91・8%であった(*1)。景気低迷に伴う雇用情勢の悪化が、改めて浮き彫りになった。また、新卒採用者のうち約3割が、3年以内に離職しているのも大きな問題だ。

文部科学省はこうした現状を踏まえ、11年度から大学・短大での「職

業指導」(キャリアガイダンス)の義務化を決めた(*2)。既に大学側はキャリア教育の重要性を認識し、大半が何らかの形でキャリア教育を導入している。その内容は、就職活動に役立つガイダンス、資格取得に直結する講座など、さまざまな工夫がされている。

今回は、いわゆる「就職対策」ではなく、大学教育の柱である専門科目と社会とのつながりを意識させることで、学生の職業意識や人生観を育成し、学習意欲の向上を図ろうとする二つの取り組みに注目した。

専門教育を通じて 将来をイメージさせる

筑波大「専門教育と融合した全学生へのキャリア支援」

筑波大は、06年度から全学で現代GPにも指定された「専門教育と融合した全学生へのキャリア支援」に取り組む。その狙いについて、キャリア支援室長の五十嵐浩也准教授は、「かつては学生が目的意識を持って大学に入学するのは自明のことで、改めて大学で学ぶ『意義』を伝える必要を感じたことはありませんでした。しかし、最近の学

生を見てみると、その前提は崩れつつあります。専門教育を通して、学ぶことの意味や社会とのつながりを考えさせ、自分の将来を自分でつくり出せる学生を育てたい。それが、この取り組みを始めたきっかけです」と話す。

取り組みの柱は、専門科目「学問と社会」と、「キャリアデザインⅠ～Ⅳ」「フレッシュマン・セミナー」だ(図1)。このうち「学問と社会」は、専門分野と社会とのつながりを考えさせる科目で、内容や実施時期は学類ごとに教員が集まって決めている。実施前は、

*1 文部科学省「平成21年度大学等卒業者の就職状況調査」(平成22年4月1日現在)

*2 文部科学省「大学設置基準 第四十二条の二」(社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制)

「キャリア教育はキャリア支援室に任せられた方が良いのでは」という声もあったが、その効果を実感し、今ではどの教員も必要な科目と捉えている。

まず、知識情報・図書館学類を例に、その内容を見ていこう。この学類はインターネットや図書館などの知識共有の仕組みや情報の流通について扱い、文理にまたがる広い知識が求められる。そのため、「哲学」や「情報数学」を1年次の必修科目とするなど、専門科目を学ぶ前段階となる知識の習得を確実に行う。その上で「学問と社会」を通じて、この学問領域が社会で担う役割は何か、この学類で学ぶことでどのような社会貢献が出来るのかを考えさせる。

「学問と社会」は2年次の1・2学期（筑波大は3学期制）に全10コマ（2単位）設けられ、主に図書館員や情報サービス業に携わる卒業生の講演を聞き、レポートをまとめるという内容だ。図書館情報メディア研究科の大庭一郎講師は、「学生時代には『何に役立つのか分からない』と思っていた知識や考え方が、社会

とつながっていると実感したという先輩の話や聞かせることで、学生に揺さぶりを掛けたいと思っています。自分が研究したいことを改めて考え、学びを深められるようにするのが狙いです」と語る。

2年生の木下奏さんは、「1年生ではそれぞれの授業の関連性が分かりませんが、『学問と社会』を通じて授業のつながりが見えるようになりまし。また、『図書館情報学』で学んだ知識が一般企業でも生かせることが分かり、卒業後のイメージが広がりました」と話す。

学問と社会をつなぐ「学びのスキル」

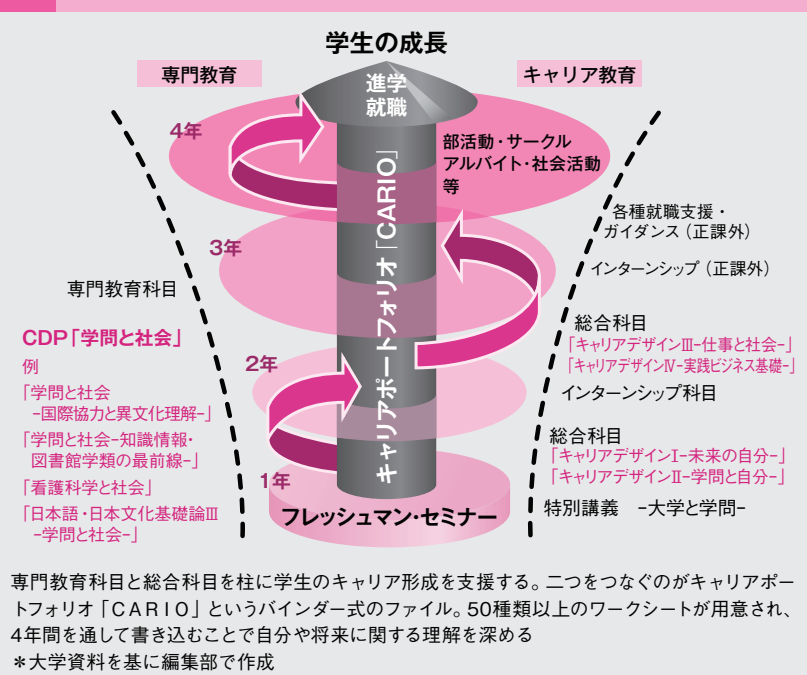
比較文化学類の「学問と社会」は、2・3年次に全9コマ（3単位）で行われる。外部講師（09年度は出版メディア関係者）から仕事内容や職業観について聞いた後、質疑応答やグループ・ディスカッションを通じて学びや気づきを深める。人文社会学研究科の宮本陽一郎教授は、「大で身に付ける専門性と卒業後の仕事内容が直結しないこともあります

が、両者を結ぶのは質問や討議の仕方、プレゼンテーションの方法など、学問を学ぶ上で必要なスキルです。

そのスキルを用い、専門科目を通して社会問題を見る視点を養うことこそが、学問と社会のつながりを見せることになると考えています」と説明する。

3年生の篠原理江さんは、「仕事内容に関する講演は課外の就職対策講座でも聞けると思いますが、正課で受けることに意味があると感じました。ディスカッションで、自分から参加する気持ちが求められることや、自分とは異なる考えの人がいることを、実感を伴って理解できたことも、大きな収穫でした」と振り返る。

図1 筑波大 4年間のキャリア支援の概要



このように、「学問と社会」で学ぶことによって、学生のキャリア意識は大きく変化する。また、この効果は学生だけでなくとどまらない。「教員にとっても自分の専門と社会とのつながりを考え直したことが良いきっかけになり、授業を改善する例が見られるようになりました」と五十嵐准教授は話す。

取り組みを始めて4年がたち、システムが確立されつつある中で、課題も見えてきた。キャリア支援室の道谷里英准教授はこう語る。

「今後、取り組みを発展させるために必要なのは、内容や成果を社会や企業へ広く発信することです。大学がこのような取り組みを行っている意義を伝え、外部から見られているという自覚を持つことが、取り組みの形骸化を防ぐと考えています」

目標を見失わないよう 社会とのつながりを意識させる

青山学院大国際政治経済学部「将来や社会とのつながりをイメージさせるカリキュラム」

青山学院大の国際政治経済学部には、外交官や国際機関の職員、国際的な企業などへの就職を目指して入学する学生が多い。学生の目的意識は同大学の他学部生と比べて明確だが、国際社会で通用するだけの専門性を身に付けるための学習は厳しく、卒業に必要な単位は135単位と他学部よりも多い。

学部長の仙波憲一教授は、学部の教育方針として「学部の基礎的な学習なくしてキャリア教育は成立しま

せん。まずはカリキュラムを通じて、高い英語力や、経済・社会・文化的な要因から国際社会を分析する力、異なる文化や価値観を持つ人と交渉し協力できるコミュニケーション能力などを身に付けてほしいと考えています。また、学生が途中で挫折して目標を見失うことがないよう、カリキュラムは常に将来や社会とのつながりをイメージさせながら、効果的に専門性を高められるよう工夫しています」と話す。

1年次からゼミ形式を取り入れる「ゼミナールブリッジ」という考え方もその一つ(図2)。1年次の「入門セミナー」では、前期に講義とディスカッションを通して学びのスタイルを確立させ、後期は教員が1コマずつ授業を担当して自分の専門領域を説明し、学科の全体像を見せる。2年次になると、「プリゼミ」で1年次の秋に選択したコースごとに専門領域の基礎学習が始まる。そして、3年次から本格的に専門分野の研究を進めるといふ流れだ。

仙波教授は、「ゼミは少数者のためプレゼンテーションやディスカッションを取り入れた授業が中心とな

り、学生の主体性が引き出される効果があります。また、1年次の秋にコース選択をさせることによって、大学生活に見通しを持たせてモチベーションを保てるようにしています」と語る。

ロールモデルを示し 卒業後の道筋を明確化

目標への道筋を明らかにしているのも、学生を学びに向かわせるための工夫の一つ。国際機関で働くことを目指す学生は多いが、正課での支援には限界がある。そこで、同学部では外部とのつながりを持たせることを目的に「外交・国際公務等指導室」(以下指導室)を開き、10年度には大学院にGLEP(グローバル・エキスパート・プログラム)を設置した。GLEPコーディネーターの塚本俊也教授は、「国際機関の職員育成に特化したプログラムとして、実務能力や語学力の向上に加え、現場経験が出来るよう支援します。初年度から学部生も高い関心を寄せています」と述べる。

国際機関や国際的な企業などで働

図2 青山学院大国際政治経済学部 ゼミと課外の概要

	1年次	2年次	3年次	4年次
正課	入門セミナー 「青学スタンダード」 (必修科目)、 外国語科目を履修	プリゼミ 1年次に関心を持った 専門分野をゼミ形式で 学習	演習IA、IB 本格的なゼミナール 教育のスタート	演習II 発表や討論中心の授 業で研究テーマを深 化。卒業論文の作成
課外	インターンシッププログラム			
	外交・国際公務等指導室			
	ゼミナール連合			

就職
大学院進学

正課の授業に取り組むのはもちろん、目的意識の高い学生は、課外のプログラムで力を付け、キャリアを考えることも出来る。インターンシッププログラムは、正課のものと課外のものがある
*大学資料を基に編集部で作成

く卒業生の話聞く機会を頻繁に設けているのも、学生にとっては良い刺激になっている。指導室には、卒業生や外部講師が頻繁に訪れる。国際経済学科4年生の清水良太さんは、「私は社会貢献につながることにしたいと考え、警察官の仕事に関心があります。指導室で国際連合人

学びの生かし方を考えて
自分の可能性を広げたい



筑波大
情報学群知識情報・図書館学
類4年
三津石智巳
（千葉県・東邦大学付属東邦高
校卒業）

1年次は、文理の隔てなく非常に幅広い領域を学びました。もともと「あらゆる知識を吸収したい」と思って入学したので授業は楽しかったのですが、中には「専門教育にどのようなつながるのだろうか」と思う科目もありました。

2年次の「学問と社会」で社会人の方の話を聞き、専門教育と社会との間にはギャップがあつて当然で、そのギャップをどう埋めるのかを考えることが求められているのだと実感できました。それからは、「自分の研究をどのように社会に還元するか」という視点を持つようになりました。

来年度には大学院に進み、「人間とコンピュータの協調」というテーマでデータベース工学を研究します。これまでの学習を通して、必ずしも、大学での研究内容に直結する仕事を探す必要はないと考えるようになりました。どのような仕事に就いても、大学で培った専門分野を通して物事を見る視点は、おそらく生かせるでしょうし、むしろ、そのように考えることで自分の可能性を広げられると思っています。

今、何を学ぶべきかを
常に意識して学習できた



青山学院大学院
国際政治学研究所(09年度に
課程修了)
神宮司真奈
（東京都立国立立高校卒業）

高校時代に「世界から紛争をなくしたい」と考え、国連で働く自分を漠然とイメージしていました。本学に入学して、夢の実現にはかなりの努力が必要だと分かりましたが、同時に将来への道筋がはっきりとして一気に意欲が高まりました。1年次から必修科目が多く、授業は厳しいものですが、前向きに取り組めたのは、「今、何を学ぶ必要があるか」を常に意識できていたからだと思っています。

特に、授業や指導室を通じて、国際機関などで働く多くの卒業生に出会えたことは、将来を考える上でプラスになりました。仕事や学生時代に関する具体的な話が非常に参考になりましたし、「自分も具体的に動けば夢は叶う」と刺激にもなりました。

今後は、スイスのジュネーブアカデミーという研究所に入り、人道法などを研究することが決まっています。国際政治経済学部での学びを通じて将来を具体的に考えることで、高校時代に抱いた漠然とした夢が絵空事ではない、現実的な目標に変わりました。

権高等弁務官事務所に勤め、東ティモールの警察官の研修に携わっている卒業生の話を聞き、海外も視野に入れて警察の仕事幅広く考えるようになりました。多くの卒業生の話を聞いたたびに、自分の考えが広がっていくのを感じます」と話す。

また、同学部では年2回、約40人の卒業生を招いて業種説明会を開催している（参加は他学部でも可能）。業種ごとに分かれ、業務内容や働く意味、就職活動などについて個人的に質問できる場合は、学生にとってロールモデルを見つけると共に、将来と本気で向き合う絶好の機会になっている。

進路指導に生かす

ディプロマ・ポリシーと
カリキュラムの接続を確認

学部教育とキャリア教育が融合せず、別立てで実施する大学が多い中、今回紹介した2大学は、学生のキャリア意識は一朝一夕に醸成されるものではなく、4年間の学部教育を通してじっくり取り組む必要があるという方針に基づきカリキュラムを組んでいた。学生の意欲に任せる

だけでは、途中で目標を見失う恐れもある。そこで、学部での学びが社会とどうつながるのかを正課を通して意識させ、「今の学びが社会に出てから役立つ」という実感を持たせるため、ロールモデルを見せて将来を具体的にイメージさせたり、学生が受け身にならないようにディスカッションを取り入れたりして、学びへの意欲を高めている。

大学のキャリア教育に注目する際は、就職に直結している対策だけでなく、正課にもしつかり目を通したい。大学が何を目指しているかは、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）によく表れている。カリキュラムとディプロマ・ポリシーのつながりを丁寧に確認し、大学説明会などで「どのような人材を育てようとして、どのような教育を行っているか」、それに対応する具体的な仕組みの有無を必ず確認しておきたい。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

学習活動を前提とした行事の構築が大切

9月号特集の宮崎県立宮崎大宮崎高校の記事を読んで感じたのは、学習と行事のメリハリが大切だということだ。本校では体育祭の準備に半月以上をかけるが、生徒の声に押されて、自習が増えちゃうことがある。教師が「学習ありき」の意識をしつかり持つことが重要なのだが、本校ではそれが出来ていない。いずれの実践例も、学習活動が前提になっているからこそ活動が生きてくるのだと実感できた。

〔愛媛県・匿名希望〕

行事は人間性を育成する絶好の機会

9月号の特集では、茨城県立多賀高校の取り組みが多く学校の参考になると思った。授業時間数削減の影響で、行事を精選した進学校は多いだろう。新学習指導要領を機に、行事を見直し、キャリア教育に取り組みようになると良いと思う。前任校でも今年から体育祭を復活することになったが、人間関係を構築する能力、耐性や社会性などを育成する方向につながることを期待している。

〔三重県・匿名希望〕

問題を多面的に捉えることの大切さを伝えたい

9月号「未来をつくる大学の研究室」にあつた、「治す」と考えるのではなく、障がいがあることを前提にその人が快適に社会生活を送れる方策を考える」という考え方は、生徒に是非伝えたい。高校生が進路を考えるときに、一つの問題をさまざまな視点から捉えることが出来るのだという理解は大切だと感じた。

〔千葉県立佐原高校・田中三郎〕

VIEW'S SQUARE

Volume **4**

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

変わらないものは「熱い思い」

9月号「指導変革の軌跡」の島根県立益田高校の新入生に対する取り組み「教師の決意表明」は素晴らしいと思った。学年通信に教師の高校時代の話を入れたりするなど、生徒に対して自分自身の生き様をしつかり見せることが、生徒の思いを更に高めるものになっている。方法はいろいろあると思うが、教師の生徒に対する「熱い思い」を伝えていくことが変わらず大切だということを変更して考えさせられた。

〔広島県立呉宮原高校・久富洋一郎〕

一つひとつの取り組みの目的を明確にすべき

生徒に身に付けさせるべき力は、従来と変わらないはずだが、生徒自身の変容も含め、さまざまな取り組みの本質的な目的が明確でないように感じている。我々教師がその目的を見失うことなく、日々教育活動を行わなければならない。その際、9月号の特集「学校行事」や「大学選択新たな視点」の「課題解決型授業」で示された観点は、改めて考え直す機会となった。

〔京都府・京都市立堀川高校・森口安紀〕

教師川柳

勉強も「熱中症」であってほしい秋

福島県・煙亭

編集後記
10月号で初めて特集を担当いたしました。取材の中で、「進路指導は生き方指導である」と、多くの先生が異口同音におっしゃっていました。言われてみればその通りかもしれませんが、では実際に生き方を指導するとはどういうことか、改めて考える機会となりました。先生方にとって「進路指導」とは何ですか？ その答えを探し続ける「VIEW21」でありたいと思います。(小林)


Benesse教育研究開発センター
ウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ
『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ
独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。注目の最新調査も随時アップ中!
「学校外教育活動に関する調査」
「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」
「第2回子ども生活実態基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能! また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

<http://benesse.jp/berd/>



VIEW21 2010 December 12月 Volume 5

次号は **11月26日発行(予定)**
『VIEW21』高校版は 年6回の発行です

VIEW21 10月号 Vol.4 2010年10月20日発行

発行人 新井健一
編集人 原茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 大日本印刷(株)
編集協力 (有)ベンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太
撮影協力 坂井公秋、南弘幸、ヤマガチイッキ
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010